
僕らの楽しい遊び方

踏鞴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの楽しい遊び方

【コード】

N9368N

【作者名】

踏鞴

【あらすじ】

高校1年生の僕となんだか面倒な友人が遊んだり喋ったりだけたりします。

これは、「僕」の平日の物語。

シリアス要素は皆無です

とりあえず自己紹介的なところから始めてみましょうか

「……いや、有り得ないだろ。これは。」

いまオセロ中。僕白。彼黒。彼（桐山桂馬）の駒？は全部で61（数えんの大変だった）。対して僕の。3つ（数えるまでもなかった）。

「いや、お前の弱さのほうがり得んだろ。」

おっしやるとうり。

「そういえばさー。舞ちゃんは？」

舞ちゃんとはこの同好会の唯一の女子なのだつ。つつても僕と桂馬と舞ちゃんの三人だけなんだけど。

そう。今は空いている第二美術室を（勝手に）つかっての同好会の真つ最中なのだつ。なのだつ。ちよつと気に入った。あ、オセロは全く関係ないよ。遊んでるだけ。

「んー？あいつは提出物だしてないからつつつて居残り」

「あはは。そんなことで居残りなんて舞ちゃんも馬鹿だねえ」

「その提出物出してない上にやることすら諦めて今ここに居るお前よりはよっばどマシだと思っけどな」

おっしやるとうり。

ちなみにこの桂馬くん。憎たらしいぐらいにお勉強ができでしまうの。運動神経だっていいしねえ。ああ。神様は不公平だよ。

「フーかなんでこの同好会入ったんだろ？まあ僕が誘ったからなんだけどさ。」

「いやいや。お前と比べれば人類の9割は勉強できる部類に入っちゃまうじゃん」

「ちよつと！勝手に人の心読み取らないでよ！」

いつからそんな特殊能力あったの？！読心術？！
というかそんなこと言わないで！割と傷つくから！

そんなこんなで、もう一戦。僕6枚。よしやあ！！倍になった！

「まだまだぼろ負けだからな。喜んでるとこ申し訳ないけど」

本当だ。

どうしてこんなに桂馬オセロ強いんだろ？頭が良いからかなあ？

「きつとお前の頭が例外的に悪いだけだろうなあ」

「今のは傷ついた！」

「気づかなくて良いことに気づいてしまったな」

「気づかせたのはお前だけだな！」

「まあでもフォロローさせてもらうけどオセロに成績は関係ないとおもうぞ」

「え？そうなの？」

「ああ、ただこの結果からお前は考える力が皆無だというだけだ」

「フォロローになってないわ！」

でも本当のことだろうからそんなに強く言えない僕。

「いや、でも他のゲームならお前強いのあるかもしれないぞ」

「そうだよね！オセロが僕に合わないだけだよね」

「…すまん冗談だ」

「おかしくない！？別に今のは可能性ないわけじゃないじゃん！まだ希望あるじゃん！」

そんな感じで数分後。

ガラガラガラガ

あら？なにこの擬音

まあいいや。とりあえず扉が開いて舞ちゃん登場。

結舞^{むすぶまい}。顔は可愛いんだけどな。うん。ど真ん中。ただ、すつごく暴力でわぎやああああ！！」

三メートルぶつ飛んだ。勿論、自分からいきなり横っ飛びしたわけじゃないよ。ぶつ飛ばされた。もっと言うとぶん殴られた。舞ちゃんに。

超いてー。

「なにすんのさ！いきなり！」

「なんかね。私が隠し…じゃない。わたしのありもしないまったくもって嘘の性格が堂々発表されようとしてたから。それを阻止したまでよ」

「舞ちゃん本当に隠す気あった！？今の一撃で舞ちゃんの性格のほとんど分かつちやっただと思っよ！？」

「そしたら仕方ない。処分するまでよ」

「こわっ！」

「大丈夫、恐いなんて感情もないもままに死んでいくから」

「そんな技術あったの！？」

「ただしあんたは苦しんで死ぬことになるだろうけど」

「なんで僕だけ例外!？」

「あんたに馬鹿って言われたような気がするし」

「……」

なぜそれを!!

にしても舞ちゃんいつにも増して不機嫌だな。こういう時は放っておこう。それが一番だ。さーて、次は将棋をしよう。桂馬、そんな名前なのに、将棋そんなつよくないからな。かてるかも。

「一番はあんたからよ。遊喜。…殺すっつ!!」

「ぎゃああああああああ!!!!」

とりあえず自己紹介的なところから始めてみましょうか（後書き）

こんなかんじでやっていきます。

遊喜。主人公のなまえです。

将棋の強さと頭のよさは全く別物。と思いたい今日この頃

舞ちゃんの理不尽な怒りがおさまるまで、僕は腹に4発。頭に2発。最後に勢い余って一本背負いで20分間ボタンキュー。

「にしても舞ちゃん。今日のこれはいつにもましてひどいんじゃない?」

僕は鳩尾と額をさすりながら言う。

「そうだな。美術室に入ってきたとたんに遊喜殴ってたし。あ、あと顔が尋常じゃないぐらい怖かったぞ」
おお。珍しく桂馬も僕の意見に同意だ。

「さっきここ来る途中にやなことあってむしゃくしゃしてたから。まあ仕方ない仕方ない。過ぎたことは忘れましょ?」

「いや、ぜんぜん仕方ないから!それただの八つ当たりだし!」
そして僕のこの痛みはまったく過ぎたことじゃないのだ。今もすげえいてえ。

うーん。大声出したつもりだったんだけど。呼吸器官がやられたせいか全然音量がでないなあ。

「八つ当たりじゃないわ。愛の突きよ」

「一体今のどこらへんに愛が!??」

「ああ、そうじゃなくて、愛姉直伝の突きという意味よ」

「ああ、どつりで...」

どつりであんなに強いわけだ。

ちなみに結愛^{むすびあい}。この高校の3年生。空手部の部長にして舞ちゃんのお姉ちゃんなのだ。

「あれ？というか君たち将棋やってたの？」

どうやら僕が気絶してるあいだにこの二人将棋をやっていたようだ。むー。僕が用意したのに。

というか少しくらい僕の心配もしてほしい。

お、舞ちゃん優勢。

「おーい。どうした桂馬。次の手はまだかー？」

舞ちゃんなんか意地悪な感じでニヤついているなあ

「くっつー！」

対してこちらは苦悶の表情。というか桂馬全部とられちゃったんだ。桂馬なのに。

ぴかーん。

そんな効果音が聞こえそうな桂馬の表情。ああ、絶対なんかいい手思いついたな。

「ふっふっふっ。舞よ。お前の飛車はもう死んでいるっ！」

どうやら某マンガ風にいいたかったらしい。語呂わりーな。そして頭もわりーな。

あれ？こいつ頭いい設定じゃなかったっけ？

まあそんな恥ずかしい台詞を言いながら手持ちの駒から歩を選び（
というか手持ちが歩しかない）舞ちゃんの飛車と向かい合うように
差した。

おお。たしかにこれで舞ちゃんの飛車は取られるしなくなった。

これで形勢逆転とまではいかずとも

舞ちゃんの作戦に大きな打撃をあたえられるはずだ。やるな！桂馬
！流石は同好会一の秀才！

まあ、桂馬以外の二人のレベルが低すぎるだけじゃん。という感じ
のツッコミは妥当といえは妥当なんだけど、それについては伏せる
のが華つてことで。漢字これであつてるかな？

「……………」

これ舞ちゃんね。どうしたんだろ。あまりの良い手に呆然としてい
るって顔じゃないよな。むしろなんか気まずい表情。

「えと…………ごめん…………」

あら、舞ちゃんが謝るなんて珍しい。舞ちゃんとはもう幼稚園のと
きからの友達だけど、最後に舞ちゃんが謝ってんの見たのっていつ
だっけ？ああ、小五のときに舞ちゃんが作った図工の作品が壊れて、
僕が犯人だと誤解されて半殺しにされたとき以来だ。

ちなみにそのときは舞ちゃんが自分で壊してそれを忘れてたってい
うオチ。やってらんねー！

「…………これ…二歩」

あれ？何の話だっけ？ああ将棋だ将棋。二フ？なんだそれ？ああ二

「えっと。忘れた」
「……………」

先輩にはそれなりに敬意をもって接しましょう。ボケるなんてもってのほか

僕らの通う新倉上高校では、1年生が1階で、それから学年が上がるにつれどんどん階が上がってゆくシステムである。要するにどんどん登校がづらくなつてゆくシステムだ。対して同好会で勝手に使っている第二美術室。これは三階の階段を上がってすぐ左、3年1組のとなりである。遊喜をはじめとする同好会メンバーの全員が1年5組なのでこれは非常に遠いといえよう。そしてこの新倉上高校。卒業後の進路のほとんどが大学進学である。そうすると真面目な3年生は教室に残ってお勉強の真つ最中だったりする。

要するに何が言いたいのかというと

「うるせー！なにしてんだー！」

こういう3年生がいるのです。あ、こっちが悪いんだけどね。

入ってきたのは3年男子が2名。どちらも顔見知りだ。

「あれ？及川先輩に吉原先輩じゃないですか。どうかしたんですか？」

とりあえず僕はとぼけてみる。

「どうしたんですかじゃないわ！うるせーつってんだよ！こっちは受験勉強してるっつーのに！つーかお前ら文化系の同好会のはずだよな！？なんでどの部活よりも大きな声だしてんだよ！」

案の定及川先輩が吠える。

「いやあ」

「照れんなー！」

しかしこのやり取りも慣れてきたな。この二人なにかとつつかかるからな。5月から数えるところという事はとっくに二桁を超えている。いや、仲いいんだけどね。

でも今回は桂馬が灰になってるからな。あしらうがめんどくさいな。

「ごめんなさい。ちょっと将棋してたもんで」

とりあえずちゃんと謝ろう。誠意は伝わるはずだ。

「いやおかしいだろ！将棋だったら大声出す必要ねえじゃん！」
「こんどは吉原先輩。」

「すみません。二歩だったもんで」
「どんな言い訳だよ。うん。自分でもそう思う。何であの時叫んじやっただろう？」

「そうか。二歩なら仕方がない」
「納得した。吉原先輩が二歩で納得した。」
「世間は二歩に優しいのかな？」

「「なんでっ!?!」」

及川先輩と舞ちゃんね。やっぱり吉原先輩のほうが変わったみたい。というか舞ちゃん先輩たち来て初めてしゃべったな。面倒なことは他人に押し付けるんだから。もう。

「へー。そりゃ大変だったな」

それからまた先輩たちに注意されたのち（主に吉原先輩。納得したんじゃないかったのか）解放された後、ちよつどよく桂馬が目をさましたから経緯をはなして、この感想もつとあんだろ。元凶お前なんだから。反省しろ。

「じゃあ防音シートでも貼るか。いや金がないな。じゃあ仕方ない。先輩たちにどっかいつてもらおう。どうせクラスは5組まであんだし、全員がのこつてるわけねーもんな」

どうやら反省する気も静かにする気もないらしい。

とうかそんなんで先輩が納得するわけないだろう。二つ目の案で先輩を追い出すな。

まあいつつもこんな感じで最終的には「無視しよう！」になるんだけど。最悪パターン。

「よし、無視しよう！」
やっぱり。

ごろごろごろおー

不意に扉の開く音。つーかこの扉直したほうがいいと思う。前回より酷くなってる。

誰だろ？ああ。来るの珍しいな。なんか用かな？

「あああああああああ！！思い出した！！」

ちよつと舞ちゃん。今大声出さなっていわれたばかりなんだから。
え？何を思い出したの？

先輩にはそれなりに敬意をもって接しましょう。ポケるなんてもってのほか（後

なんか毎回叫んで終わってる気が。まあいいか

記憶力が悪いのは仕方ないけど、流石にここまでくると記憶力ないんじゃないの
体格、見た目に特徴ある人ってよくいるじゃん？例えば僕なら特徴
とまでいかなかったも、162cmしかないこの身長がコンプレック
スだし、舞ちゃんは小さい胸を気にしているはずだ。桂馬は身長は
180にとどきそうなくらいあるし、顔だって男の僕から見てもか
っこいいし……殺してやろうか。
まあ、そういうことで今来たこの方もそんな感じで気にしてるんだ
ろうなーという体格の持ち主だった。

谷口まどか。この高校の美術教師。年齢は30代後半。で、最も書
かなければならない点はやっぱりその年中妊娠しているのじゃない
かとも疑われるお腹だろう。たぶん僕の目測がただしければその体
重は優に90キロを超え・

「おい、それ以上言ったらどうなるかわかってんだろうな」

あれー？僕まだなんもいつてないよー。というか谷口先生も読心術
できるのかよ。なにげ舞ちゃんもつかってたし。もしかして使えな
いの僕だけ？

「そんなことよりそんなことよりそんなことよりきいてきいてきい
てきてあのおねあのおねあのおこのどうこうかいがなくなちゃうんだ
よー！ー」

ああもう。舞ちゃん大声出しすぎだし。全部平仮名で読みづらいん
だよ。なにをそんなに慌てているんだか。

この同好会がなくなちゃうんだよー！ー

「だから人の話は最後まできけつてーの。救済措置があんだよ」
「ほう。肉っ…先生。それを聞かせてはもらえないでしょうか」
「どうやらこのあだ名、桂馬もつかっているようだ。」

「文化祭におめーらの活動の記録を出展しろ。ここ貸してやつから。たしか未確認飛行物体及び未確認生物研究同好会だったよなここ。それで活動がみとめられりゃあ継続OKってことで」

あー。たしかそんな名前だったね。この同好会。

「そんなっ！ずっと遊んでばっかだった俺らにあと3週間てなにがでるといいます！？」

そんな悲しいこといわないでー。ほんとの事だけど。

「じゃあ解散しろ」

つめたっ！

じゃあせいぜいがんばれよー。と、あの憎たらしい肉団子は去って行った。

「ああ、そういえば」

と、扉のちょっと前で肉団子が立ち止まって言う。

「そのあだ名もう一回使ってみる。タダじゃすませねえぞ」

あ、ばれてたんだ。

「よし、じゃあいくぞ」

少し緊張ぎみの桂馬の声。僕らも小さく頷く。……突撃っ！

「うらあああああああ！会長はどこだあああ！！」

僕が考えた同好会存続のための（文化祭活動に取り組むのは面倒なので、とりあえず保留）手段。教師がだめなら生徒を攻める！それなりの決定権を持つ生徒会に攻め込めばなんとかなるかもしれない。あと、幸いにこの間生徒会役員がかわったばかり。1、2年のメンバーなら勝手もわからないだろうし、暴力に訴えれば案外いけるかもしれない！

うちには、空手部姉に鍛えられた舞ちゃん、中学校の前半めちゃくちゃ荒れていた桂馬がいるんだ。さあ、やってしまいなさい！え？僕？できるわけないじゃん。スポーツ経験すら皆無だよ。

ここの二人はちょっと有名なので（悪いほうに）すぐに道が空いた。

「俺が会長の阿部牛頭丸あべしすめまるだが、何か用かな？」

…ああ、確か会長そんな名前だったね。親の顔が見てみたいよ。

「俺らの要求はただ……ひ……と……っ」

あれ？どうしたんだろ？急に元気がなくなったぞ？

そのとき僕は見てしまった。会長の後ろに立つ教師の姿を。

あれはやばい！本能でそう感じた。名前は忘れたが確かすごく怖い教師だ！
気がつけば3人逆方向に走りだしていた。

結局生徒会室にいた時間37秒

「作戦しつぱいだねえ」
逃げ足が速いことに定評があるこの僕が一番に呼吸を落ち着けて言った。

「しかたない。やっぱ正攻法でいくか。文化祭に取り組む！」
パチパチパチパチ。

そうして僕らはちゃんとした計画を考えるべく家に帰った。各々月曜日に発表だそうだ。

なーんか締まらんねえ

記憶力が悪いのは仕方ないけど、流石にここまでくると記憶力ないんじゃないの

なーんか締まらんねえ

僕らの考察。桐山桂馬の場合 「こんな大人になりたくないっ！」

「ふう」

夕ご飯を食べ終わった桂馬は、一人自室で文化祭のことについて考えていた。が、何も思いつかない。

（しかたない。兄ちゃんに聞いてみるか。あのアホな親父とかよりかはましだろう）

酷い言い草である。

桂馬の兄は今年で大学2年生。この家からは離れて暮らしているため、話そうと思ったら電話しかない。

プルツガチャッ

（はやっ！）

桂馬が電話をかけてから桂馬兄が電話にでるまで、1秒とかからなかった。

「はい！ハロー俺の愛しのハニーちゃん！今日もまた一段と綺麗だね！」

「ちゃんと名前見てからでやがれ馬鹿兄貴」

無論、これは桂馬に対して言った言葉ではない。桂馬兄には2つ下の彼女がいるらしく、これもその彼女と間違えたようだ。

「そして電話で容姿をほめんなよ。100%お世辞じゃねーか」

「ああ。なんだ桂馬か。切っていい？」

「なんでだよ！まだなんも話してないじゃん！さっきのハイテンションはどこいった！」

「っーかなんで俺のケー番知ってんの？」

「お前が教えてくれたんだろっ！というか俺、一番最初に登録したの兄ちゃんだよ！」

「お前だと分かったいたらでなかったのに…迂闊だった」

「ちよつとまつて！俺ら本当に家族だよな！」

「そうか…お前はまだ知らないのか…」

「やめるー！別に俺出生の秘話とかないから！普通に生まれてきたから！」

「で？なに？切つていい？」

「話が振り出しだー！！！」

（疲れた。電話して1分しかたつてないのにこんなに疲れた。やっぱり兄ちゃんに聞くのは失敗だったかなあ）

「いいから、俺の、話を、聞け」

疲れと怒りから必要以上に区切つて言う桂馬。

「わかったわかった。話ぐらい聞くから。ただいつ愛しのハニーちゃんから電話がかかってくるともかぎらないから2分で話せ」

「わかった」

たっぷり10分使った。

「えーと。じゃあ簡単にいうと文化祭何すればいいのかわかんないよーってことか？」

「うん」

「だったらもつとコンパクトにまとめやがれ」
無駄な話が多すぎんだよー。と兄。

(ふっ。わざとだ)

「とういかなんでその未確認なんたらなんたら同好会にしちゃったんだよ。もつと別の、そうだな…年中お遊び同好会とかにすりゃあこんなことにもならなかっただろうに」

「いや、それだと流石に生徒会につっぱねられそうだけど」

(たしか遊喜のやつが「せっかくだから長ったらしくて、かつこい名前がいい」とか馬鹿なこといったんだっけか。元凶はあいつか)

「じゃあお前の日記提出しろ。お前も十分未確認生物だろ」
「殺すぞお前」

そもそも桂馬は日記をかいていない。

「あつ。そういえば未確認飛行物体なら見たぞ」
「へえ」

桂馬が少し興味をもった。

「えつとな。基本的には青か白で、頭のプロペラだけは黄色かったな。でもちゃんと手足があつてよく見ると狸のような顔が…」

「ドラ○もん!？」

「そういえばツンツン頭の目の細いガキも一緒にとんでたな」

「ド○えもん、ス○夫に乗り換えやがった!」

(金か!?! やっぱり金なのか!?!)

「ふたりで楽しそうに喋っていたなあ」

「やめて！それ以上悲しい話をきかせないで！」

（の○太がかわいそうだ！）

「おっと。お前相手に無駄に話しすぎてしまったようだ」

「え？」

「じゃあまた。元気だな！」

「ちよつとまって！まだ役に立つこと何も聞いてない！」

ツーツーツー

「一方的に切りやがった」

桂馬の独り言がむなしく響く。

「まあいつか。久しぶりに兄ちゃんと話せたし」

桐山桂馬。意外とポジティブな男である。

僕らの考察。結舞の場合

「べっつにあんたのためじゃないんだからねっ!」

「ただいまー」

「おかえり、お姉ちゃん」

今のはただいまと言った方が舞である。ではお姉ちゃん、といったのは誰か？もちろん妹だ。彼女の名前は結^{ゆい}現在中学1年生だ。

(愛、舞、結。たしかに語呂はいいんだけどさ、苗字とのバランス考えようよ。結結。絶対変じゃん!)

これは舞が漢字を読めるようになって初めて持った感想だ。うん。とても同感だ。

「あれ？どうかしたの？珍しく真剣な表情だよ？具合悪いの？」

「そうかー。お姉ちゃん、真剣な表情してるの珍しいかー。具合悪

そうに見えるのかー」

そう言っつてゆいの頬をつまむ。

もちろん文化祭の事について考えていたのだ。

「おねえひゃん。いひゃいひゃい」

「そっついえばさ、ゆい」

手を放しゆいのほうをむく舞。

「あんたの中学校ももうすぐ文化祭よね。参考までにあんたのクラスなにすんの？」

「中学校だからねそんな大したことはしないよ。個人の作品の他に

はクラスでなんかおつきい工作してるけど」

「へー。何作るの?」

「金剛力士像」

「レベル高っ!」

(そしてまったく参考にならないわね。まあ愛姉帰ってきたらきいてみましょう)

「今日愛お姉ちゃん遅くなるってよ」

「え?なんで?」

「えっとね。文化祭準備だって」

「……」

(そういえばウチのクラスなにやるのかしら。流石にまだやることすら決まっていってことはないでしょうね。…大丈夫よね)

「私のクラスはもうほとんど終わってるからすぐ帰っていいんだ。

そういえばお姉ちゃんも帰ってくるの結構早かったよね。はかどってるの?」

「ああ、うん。そう。そうね。それなりね」

しどろもどろ舞。

まだ始まってすらないとはいえない。

「たっただいまー!」

それから暫く。愛が帰ってきたようだ。

「あ、おかえりー」

「おかえり、愛お姉ちゃん」

みんなりびング集合。

「いやー聞いてよ舞にゆい。大変だったぜー今日は。課題やんないといけないの忘れてたし、補修も結局今日だったし、チャレンジャーも性懲りもなくきたし、その全員ぶっ飛ばしたし、夕日に向かって走ったし、彼氏君は電話にでてくんねーし、今日の夕飯は魚だし」「あれ？ほんとに文化祭活動やってた？」

「いまだき夕日に向かって走ってんじゃねーよ」「魚で悪かったわね」

上から、ゆい、舞、台所から登場結家母。

ちなみにチャレンジャーとは愛を倒して名をあげようとする者たちである（男女問わず）。3日に一度はこの挑戦をうけているらしい。いつの時代だよ。

「うーん。ぶつちやけ一部の生徒でがんばってるって感じなんだよ。私いなくても何とかなるだろうし。というかその隣で勉強してる奴だっているんだぜ？」

（あー。及川と吉原とかか）

「そんなことより愛姉、きいてくれ。私たちの同好会がピンチなんだよ」

「うん？なんだ？」

ここは桂馬兄とは違って、やさしい姉だ。いや、こっちの反応が普

通か。

お話中。。。。

「はいん。なるほど。要するにその展示の内容で存続かどうか決まるわけか」

「うん」

「もっと簡単な同好会だったらよかったのにねえ」

「そうだよね」

（あれは確か桂馬が名づけ親だったよな。なんか一番確実に通るか
らうつつて。あいつが元凶か）

「そういえば未確認飛行物体なら私、見たことあるわよ」

「えっ？ほんと？」

なんかやな予感。

「うん。なんかね、基本的には青と白で、頭のプロペラだけは黄色
かったな。でもちゃんと手足があつてよく見ると狸のような顔が
…」

ああやっぱり。

「ああそれ。小学校のとき学校一緒だった園村くんだわ」

心当たりあるんだ！そしてそんな奴と学校一緒だったの！？

「そういえばツンツン頭の目の細いガキも一緒にとんでたな」

「それは親友の佐藤くんね」

「ふたりで楽しそうに喋っていたわね」

「昔からふたりでよく飛んでいたものね。ほんとに仲良いんだから」

その前に飛べることに疑問をもとうよ！ちよつと前までただのナレ
ーションだったのにツツコミになっちゃったじゃん！

「ねえ他にはー？もっとすごい話聞かして」

いや、これでも十分すごいと思うよ。てか、その園村くん調べろよ。

「うーん。もう無いかなー」

そりゃそうだ。

「愛お姉ちゃん、舞お姉ちゃん。こはんだってよー」

「「はい」「」

(でもやっぱりこのままじゃまずいわよね。月曜までに他の人にも
聞いておこつ)

結舞。意外と真面目な女だった。

(意外とってどういう意味よ！) バスッ！ いてっ…

僕らの考察。

楽家遊喜の場合

「僕には無理です！」

もう二人とも帰ってしまったようだ。さて、そろそろ僕も家に帰ろう。

「おい。楽家お前ちょっと来い」

あれは担任の松戸ティーチャーだ。何の用だろうか？

「お前提出物出してないだろ。ちゃっちゃとだせ。やってねーならやれ」

…すっかり忘れていた。

結局僕が校門を出たのはみんなより2時間おそかった。

あれ？あれ誰だろうか？

僕が校門を出るとき校門の前に男の人がたっていた。

男の人がたっていた。これだけなら別に視界にも入れずに通り過ぎていただろう。

歳は三十代前半ぐらい。体形は中肉中背。ここだけならまだ普通。問題は服装だ。着物を着ている。いや、浴衣か。なんにせよもう10月になるうとしてこの時期には少し寒そうである。あと、右手には唐傘。口には煙管をくわえていて、ご丁寧にも足には下駄を履いている。

お前はどっかの時代からタイムスリップでもしてきたのか。

こういう面倒そうな奴はスルーに限る。

「おお。人だ人だ。ちょっとまってその少年」

結構おそい時間だったので周りには僕しかいなかった。

「はい？なんか用ですか？」

渋々ながらとりあえず返事をする。あと、内心「今はいつの時代ですか？」と言われないかドキドキだった。

「ここら辺に新倉上高校という場所はないか？」

「いやここですよ！。でかかと校門に名前書いてあるじゃないですか！」

しまった。ちょっとびっくりして初対面の人に突っ込んでしまった。でもどうやらタイムスリップはしてないらしい。よかった。

「そうか」

浴衣の人は僕のつつこみには特に触れずにつぶやいた。

「トラップではなかったのか」

……誰がこんな大掛かりなトラップつくるんだよ。億単位で金かかるじゃないか。

「いやあ、すまない。職業柄人に恨まれることが多くてね。こついで警戒は癖なんだよ」

「あんたいつたいどんな仕事してんだよ！」

「？。今は教員だが？」

「おかしい！絶対におかしい！普通なら恨まれることはないはずだ！」

そして文の最初と最後にクエスチョンマークをつけるな！僕がおかしい質問してるみたいじゃないか！

「ただし、趣味が空き巢、いじめ、悪戯、スリ、詐欺、あと上司のツラを取ることに」

「あんたは教師失格だ！」

「なんだ。人の趣味に口出ししないでほしいな」

「確かにそうかもしれないが、その趣味の中に犯罪が混じっているときは話は別だ！！！」

もう敬語を使うことすら忘れていた。

「そうは言ってもだな、これ見よがしに、ばればれのカツラをかぶる方も悪くはないか？」

「それじゃない！確かにそれも褒められた行為ではないが問題なのは他の5つだ！」

それともお前は本当にツラを取るのには犯罪だとおもっているのか。いや、訴えられるかなあ。

「ははっ。なかなか楽家君はおもしろいな」

「あれ？なんで僕の名前知ってたんだよ」

「趣味だよ。趣味」

そうやって僕の生徒手帳見せびらかす浴衣。

盗られていたっ！いつの間につ！

「じゃあわたしはもう行くが、どうだ、時間をとらせてしまったお詫びにそこらへんの自転車の鍵でもあけてやるつか？」

「いや、遠慮します」

何お詫びで犯罪に加担させようとしてんだ。

「そうか？じゃあこの傘でももらってくれ」

そういつて自分の唐傘を投げる浴衣。

「え？いらねえよ」

「まあそう言うな。天気予報ではそろそろ雨振るらしいぞ。使ったら捨てて構わないからー」

もう浴衣は校舎に向かって歩き出していた。

まあそう言われたら返すのもなんだか悪い気がして、もらっておくことにした。

「あ、そうだ」

浴衣が振り向いて言う

「わたしの名前は夜行だ。逆夢夜行。いつまでも浴衣じゃあわたしが可哀想だ」

そういつてもういちど歩き出す。

「ああ、じゃあな。夜行」

なんか、そんなに悪い奴じゃないのかもな。傘をもらったただけだが不覚にもそう思えてしまう。

とりあえず、この傘は捨てずにとっておこう。

「おい」

「？」

そこにいたのは、いかにもって感じの不良高校生三人。わー。この状況は久しぶりだなどうしよう。

その三人のうちの真ん中が喋る。

「お前か。俺の傘を盗んだのは」

「は？」

はあああああああああああ！！？？

夜行おおおおおお！！てめええええええええええ！！

くそおおおおお！もう少し疑うべきだった！あの浴衣とこの唐傘いかにもマツチしてたから気づかなかった！っーか確かに全然雨降る天気じゃねえ！最初っからこれがねらいか！今度会ったらぶっ殺す！

「とりあえずこっちこいや」

首根っこをつかまれて路地裏へ。

これは夜行って人にもらったんですー。と言っても絶対信じてもらえないな。経験上知っている。ということは今僕にできることは3つ。

- 1、戦う
- 2、逃げる
- 3、土下座

僕は2と3で迷う。前は逃げてややこしくなっただからな。謝ろう。土下座しよう。

「よし、ぶっ殺すか」

あーれー。謝って許してもらえそうな雰囲気じゃないよー。というか傘ぐらいでそんなに怒らないでよー。

そんな僕の切実な願いもむなしく、第一発が僕の左頬に

バスッ

ドツカアアアン!!!

僕が殴られるのと同時に三人の高校生が飛んだ。それも三人全員約10mほど。もちろんその中に僕を殴った奴もいたので、僕へのダメージは随分減った。

「よー楽家。久しぶり」

一回の蹴りで三人の高校生を10mぶっ飛ばした張本人。赤宮鉤あかみやかななが言った。

あいかわらず凄まじい身体能力である。舞ちゃんの比ではない。もう交通事故級だ。みんな気絶しちやってるし、サッカー部にでもいけばいいのに。

「お久しぶりです。鉤さん。あと、助けてくれてありがとうございます。ありがとうございました」

「いいのいいの。俺とお前の仲じゃん」

そんな仲になつた覚えはないけど。

ここで鉤さんの説明が必要かもしれない。長くなるかもしれないがお付き合い願おう。

新倉上高校2年3組1番赤宮鉤。

彼はこの高校。否、ここの市一帯で一番有名な御方である。ではなぜ有名か。平たく言うと不良の番長。鉤さん達は自らの集団を新倉上八連隊と名乗っていて、鉤さんはその総隊長をやっているらしい。高校生の不良集団にこの名前は大げさかもしれないが、確かに“隊”というだけの規模はある。

容姿もまあ奇抜や奇抜。まず、髪の毛は赤宮という苗字を意識してか真っ赤である。それをうしろでくくっている。服は夏冬問わず学ランで、これでもかというぐらいにネックレスや指輪をしている。極めつけは、絶対職務質問されるだろと思うような立派な模造刀。これは常にベルトにさしている。

さて、なぜ鉤さんと知り合いなんだよと思う方もいるとおもいます

が、それはまた今度。

「今日は一人ですか？というかなんでここに？」

「いや、大田原もいるぞ。そっちに待たせてるけど。ここにいたのはたまたまだよ。おまえに用もあつたけどな」

大田原とは八連隊五番隊隊長で鉋さんの一番の仲良し。後、すげーでかい。190以上あると思う。

「あ、聞いたぞ。お前ら生徒会室に攻め込んだんだって？」

「え？なんでそれを？」

「おお、その質問を待っていた。牛頭丸からきいたんだよ。あいつ、隠してるけどなウチの二番隊隊長なんだよ」

なんと。驚愕。まさか生徒会にまで根を張っていたとは。

「そんな二番隊隊長から伝言だ。次攻めてきたら教師がいようが問答無用でぶっ飛ばす。だって」

かかか。と鉋さんは軽快に笑う。

よく肝にめいじておきます。

月曜日まで文化祭のことはすっかり忘れていた遊喜だった。

僕らの考察。 楽家遊喜の場合 「僕には無理です!」 (後書き)

今回は、いつもより少し長め。
なのに進展なし。

問題の月曜日。僕らはやっぱりそこにいた

9月27日月曜日。放課後、第二美術室にて

「なーんでだれも考えてこないんだ！」
舞ちゃんの一喝。

「お前だって同じだろうが」
と、桂馬。

「うっ」

そういえば僕、金曜日帰つてるときにはもう忘れてたな。あの日はいろいろあつたし。ま、いつか。

「「よくないわー!!」」

「ぶっごっ！」

舞&桂馬の蹴りでぶっ飛ぶ僕。

「いきなりなにすんだよ！二人とも本気で蹴りすぎ！」

読心術にはもうなれた。いちいちつつこまない。

「言い合つてもしょうがない。今から考えるぞ！」

何事も無かつたかのように始める桂馬。

「『第1回、文化祭俺らどつするよ？企画会議』。みんなどんど
ん意見を言え」
わーい。パチパチパチパチ。
社交辞令。

「はい」

そう言つて手を挙げる舞ちゃん。

「よし舞！」

「UFOの仕組みについて発表」

「その前にUFOを見つけなきゃなんねーだろうが！次！」

「はい」

「遊喜！」

「とりあえずコンビニで買って調べればいいと思う」

「そつちのUFOじゃねえよ！次！」

「はい」

「舞！」

「飛行機の仕組みについて発表」

「俺らの同好会の名前を忘れんな！あれ人間が開発したものだろ
うが！空飛べばなんでもいっつー話じゃねえんだよ！次！」

「はい」

「遊喜！」

「体の仕組みについて発表」

「もう最早飛んですらないじゃねーか！確かにまだまだ謎は多いけ
ど！それは俺らの仕事じゃない！いいかげん〇〇の仕組みから離れ
ろ！次！」

「はい」

「舞！」

「メイド喫茶」

「離れすぎだ！一体どこにお前は行ったんだ！？次！」

「はい」

「遊喜！」

「冥土喫茶」

「恐い！お客さんをあの世まで連れてく気か！次俺！」

「ん？ああ桂馬どうぞ」

どうやら押したい案があるらしい。

「お前らの日記提出」

「「なんでっ!?!」」

大体このやり取りがあと10分ぐらい続いた。

「はあ…はあ…はあ」

流石に桂馬、大声出しすぎて疲れたようだ。

「そついえばさー。私達のクラスってなにすんの？」
舞ちゃんが僕に聞いてきた。

あれ？知らなかったんだ。もうやってる人もいるのに。

「確かこの市の歴史を調べるって話だったよ。舞ちゃんにも役割
あんだからやらないとだめだよ。といってもネットで調べただけで、
2、3日あれば終わるって」

「負けた…中学生に負けた…」

あれ？せっかく僕が耳寄り情報おしえてあげたのに。残念そうな顔
だな。

ちなみに
文化祭は、
我がクラスを見習ってネット
で調べて紙にかくだけ
にした。

騒がしい火曜日。いやな予感は的中するものだ。

火曜日。僕の学校では全校朝会があった。

いつもながら先生の話が異常に長い。こちら辺で殺人があったからってそれが僕に何の関係が？無差別だったら防ぎようがないだろうが。とか思っている。

「では次に、先週病気で入院なされた後藤先生の代わりに新任の先生を紹介したいとおもいます」

何の次かは分かんないが、そう校長だか教頭だかが言った。

あー。そういえばそんなこともあったね。つーか夜行じゃねーだろうな。そういえばあいつ教師やってるつってたし、校門の前にいたし、怪しいなあ。と言うかもう絶対そうだろう。

「ご紹介いたします。山田タロウ先生です」

あれ？違うの？

「どうも。たダイマごしょうかいニあずかりマシタ。エイゴきょうしノ山田タロウデス」

そういつてでてきたのは、眼鏡をかけて、髪の毛を金髪にこそしているがまぎれもなく逆夢夜行だった。

なにしてんだアイツは！！

あいつの行動ひとつも理解できねーよ！なんで偽名使ってたんだよ！

なんで片言なんだよ！そのイメチェンはなにがあつた！そして髪の色変えるぐらいだったら服も変えるよ！何でいまだに浴衣着てんだお前は！聞いたことねえよそんな教師！つーかそんな奴を雇うな！こいつものすごく怪しいだろうが！！

思わず叫びそうになった。

ひとつの行動ひとつの言葉でこんなにつっこみ所をつくるな。

「えート。歳は28デス」

あ、結構若かつたんだ。30はいつてるもんかと思つてた。いや、嘘っていう可能性もあんのか。

「ニホンじんト、アメリカじんノ、はーふデス」

嘘つくな。お前の頭の中ではアメリカ人⇨金髪か。安直だな。

「おとといノにちようびニ、ばんくーばーカラきまシタ」

おい、アメリカ人とのハーフ設定はどこいった。バンクーバーはカナダだ。ついでに少なくとも金曜にはお前ここにいただろう。

「ニホンだいすきデス」

そりゃ日本人だからな。

「ダカラみなさんモだいすきデス」

どういふ方程式だよ。僕らは日本じゃないぞ。

「ワタシはつき二・四かいはがっこう二くるノデ、みつけタラきがる
二、コエ、かけてくだサイ」

週一かよ！もつと仕事しろ！それだったら見つけること自体目珍し
いじゃねえか！

「デはみなサン、またアシタ！」

あ、明日は学校来るんだ。というか今日はもう帰るのかな？

「結構面白そうな先生だったな。けどあれ、絶対日本人だよな」

「あゝ。そーかもねー」（棒読み）

ところ変わってここは教室。今桂馬たちとおしゃべり中。夜行と知
り合いなのは伏せておこう。めんどくさい。

「なんだ反応悪いな。なんかあつた？」

「いやなんでもないなんでもない。ちよつと今日食ってきた蟹があ
たちやつただけさ」

「どんな朝食だよ」

もちろん嘘だ。

キーンコーン

おっと。授業が始まるみたいだ。一時間目は……英語………やな予感。

「よし授業始めんぞー。席つけー。こら吉田、さっさと席つけ」

おい、一回目なんだからそんな担任みたいな感じで入ってくんな。夜行。あとそいつ吉田じゃないから。川井くんだから。憶測で人の名前を呼ぶな。川井くん、戸惑ってるじゃん。

「えーと。全校朝会でも話あつたけど、山田だ。よろしく」

「あれ？先生言葉遣い普通になってますよ？」

クラスメイトの一人が言った。ああそういえば。

「もうあれ疲れた。めんどい」

じゃあ最初つからつかうな。

「あれ？おお！楽家！おまえこのクラスだったのか！元気だったか！？」

みんなの目がいつせいにこっちを向く。

ばれたか。まあそりゃばれるか。つーか呼び捨てになったのな。オレも呼び捨てだからどうでもいいけど。あと、元気も何もこの間あったばっかだろ。

「ええ、先生がくれたあの傘のおかげで厄介ことになりましたけど」

「よーし。じゃあ教科書364ページ開けー」

「無視すんなや！お前から話しかけたんだろうが！」

あと、教科書そんなにページ数ない。誤魔化したのがバレバレだった。

「えつとじゃあ先生になにか質問あるかなー？」

仕切りなおす夜行。

「先生は結婚してますか？」

だれかが聞いた。

「そういう質問は事務所的にアウトです」

なんだよ事務所って

「なんで浴衣なんですか？」

「君にはこの浴衣が見えるのかい？それは心がきれいな証拠さ」

「出身はどこですか？」

「そこ」

「好きな食べ物は何ですか？」

「少なくとも君はおいしそうじゃないねえ」

「なんでこの仕事やってるんですか？」

「そんなことに本当に理由は必要かい？」

いや、必要だろう。面接のときどうしたんだよ。

おりあえずこの質問で分かったことは、夜行には真面目に答える気がないということだけだった。

そのあとの授業はぐくぐくだった。

迷惑な木曜日。 「どーしてどーなるのー!!」

「なんかさあ」

いつものように放課後。 僕らはお遊びとお喋りに興じていた。

「桂馬、将棋強くなってない？」

「そんなことはないだろう。別に普通にやっていたただけだが？」

「んなわけあるかああ!!」

僕の駒、王、銀、歩、歩、歩、歩。桂馬、その他。

「前までこんなに強くなかったじゃん！僕とどっこいどっこいだったじゃん！おかしくない!?この急成長!」

「そういえば最近筋トレしてるからな。そのせいかも」

「絶対違う!!」

というか僕の王50回ぐらいとれたのだ。こうしている今だって飛車の位置を動かすだけで詰みになってしまう。でもそうしない。桂馬だから。

「ちょっとうるさいわよ。集中して読書ができないじゃない」

「あ、ごめん」

どうやら舞ちゃんも読書中のようだ。本のタイトルは、…「嫌いなアイツを消すためには」。……。うん、見なかったことにしよう。

「そういえば」

びくっ!!

「な、なんででしょうか。舞様」

やばい、つい敬語になってしまった。

「?。なによ、それ。まあいいや、山田先生から伝言よ」

え?夜行から?(あいつはここでは山田タロウで通している。どんな偽名だ!)あいつ今日学校来てないだろ。

「なんかね。なにか教室で困ることがあったら1階階段前廊下の掃除用具入れに行くといい。だって」

……絶対なんかしたな。というかいやがらせるためだけに学校来たのか。

「しかたない。教室行くか」

「おい、将棋はどうした。俺まだ全部とってねーぞ」
「しるか」

おりゃああああ!必殺!ちやぶだい返し!

ばっしゅーん。

「あああ!せつかく勝ったのに!」

まだ勝ってねーだろうが。いや、あそこから逆転すんの無理だけどね。

「なんか困ってることとかあるかい？なんでも解決、他力本願の楽家遊喜くんが即効でカイケツしちゃうよー」

多少疲れ気味な声で僕はいった。ここは教室。なんかみんな探し物をしてたんでとりあえずこえかけてみた。

「なんで数ある四字熟語からそれをセレクトしたんだよ。まったくやる気が感じられねーよ」

そう言うのはクラス委員長の鹿又くん。いやあ悪いねえ作業中断させて。

「で、一体どうしたんだーい？」

「お前にいっても無駄だとは思っけどな。ちよつと文化祭で使う資料がなくなっちまったんだよ」

「もしかしてそれはこれのことかい？たららたったらー。しりよおー」

似てないものまね。

僕も馬鹿じゃない。ここに来る前に掃除用具入れにいつとってきただ。

「おい…」

あれ？どうしてだろう？感謝してる声じゃないな。

「これ、お前がやったのか？」

そういうことかー！なんであいつ僕に言ったのかと思ってたけどこれが狙いか！くそう！馬鹿だった！

「いや、ちがうちがう！たまたま掃除用具入れ見たら入ってただけ！それだけ！」

夜行のことはいつても信じてもらえないと思い、偶然装い作戦。言った後で気づいた。これも信じてもらえないな。

「なーんでたまたま掃除用具入れ見るんだゴラアアア！！！」

「ごめんなさい！！！」

謝ってしまった。これでは肯定したも同然だ。逃げる僕。

「おいみんなあ！遊喜血祭りじゃあ！」

「「「 おう！！！！」「」」

ほかの作業というか資料を探していたメンバーもいつせいに飛び掛ってくる。みんな元気いいなあ。

僕普段から良い行いしてないもんなあ。みんな信じてくれないだらうなあ。

どうやらみなさんそうとうな怒りのようで、すごい勢いで追いかけてきた。

逃げる僕。追いかける鹿又くんほか数名。その光景はすさまじく、

先生すらも注意できないほどだった。

本当に誰か彼らを止めて…。

「どーしてこーなるのー!ー!」

意味もなく叫ぶ僕だった。

分からない火曜日。 違った価値観

どうやら鹿又くんが死んだみたいだ。

あら。初登場して次の話までには死んでるとかどっかの雑魚キャラみたいね。というかだから昨日学校居なかったのか。逆にそれだと居たら恐いしね。

そんな軽口言ってる場合じゃないらしい。

全校集会があつて学年集会があつてその次に学級での先生のお話まであつた。

めんどくさ。

そんなわけで学年集会の途中から戦線離脱。どうせ勉強するわけじゃないしね。あ、たとえそつでもしないしね。

「あー。楽しい家で遊んで喜ぶと書いて楽家遊喜くんじゃないか。どうしたんだい？こんなところで。確か今は先生が大切なお話をしてるんじゃないか？あなかつたっけ？なんの話だったかな？最近よくいる不審者の話だっけ？」

校庭をあるいてると声をかけられた。

見ると、校庭の木の上でハンモックに寝ている夜業がいた。もちろん浴衣姿で。

「不審者はおまえだ!!」

なにしてんだ!こんなときに!

というか1週間ぶりに見た!

「ひどいなあ遊ちゃん。別にこのハンモックはわたしが用意したわけじゃないよ。考えてみなよ。らくくんだってこない所にハンモックがあつたらついつい寝てしまうのが人間の性つてもんだろ?おつと話が逸れたね。で、ゆっきー。一体先生は何の話をしてるんだい?」

「まずは僕の呼び方を統一しろ!話はそれからだ!」

「じゃあ、ゆきりん。一体なんの話をしていたんだい?」

「...」

それになるのか。いままでになかった選択肢だな。

「...生徒が死んだんだよ。詳しい理由はしらないけど」

「はー。なるほどなるほど。それで楽家くんはその生徒の後を追って死のうとしていて。それは教師として止めないといけないな。今度いい屋上でも紹介してやろうか?」

「お前言ってることがめっちゃくちゃだぞ!」

つーかなんだよ、屋上紹介するって。死ねってか?

「あ?死なねえの?なんだ」

「なんだじゃねえよ。やつぱり教師失格だよお前は」

「じゃあなんでそんな苦しそうな顔して歩いてたんだい?」

「今日食った蟹があたっちまったんだよ」

「それ、わたしと一緒にだねえ」
「マジで!？」

嘘だ。

本当は分からなかったから。なんで人間一人死んだ位でどうしてあんなに悲しそうに出来るのかが。なんでみんなあんなに泣いているのかが。

本当はみんなに聞こうと思った。「どうしてそんなに悲しそうなの?」と。でもやめた。まえに同じようなことがあつて舞ちゃんとすごい喧嘩になつたのを思い出したから。もうあんなことはやだ。

でもあの場所にはどうしても居られなかった。

苦しかったから。

「そうだねえ。最近はずかになつたとはいえ蝉がつるさかつたからねえ。最近だと秋の虫かな?」

「なんの話してんだ!?!お前!?!」

「え?だって楽家くんさつきどうして鳴いているかーとかいつてたから虫の話かと」

「無理やりすぎる!」

そして僕は口に出していった覚えはないぞ!夜行!

「そういえば今まで突っ込むのに必死で言う暇なかつたけど、外見元に戻してるんだな」

夜行はもう金髪も眼鏡もしていなかった。

「ああ、秋田からね」

「感じがちがうぞ」

「楽家くんもね」

会話だけ聞いていたらなんのこともかさっぱりわからないだろう。そこは感覚。

「まあ実際のところもう辞めようかと思ってるしね。この仕事」

「早っ!!」

まだ2週間もたっていないだろうが。飽きやすいにも程がある。

「で？なんでまた」

「本当の姿を見られてしまっただけはもう恩返しをすることはできません。って感じ？」

「お前は鶴か」

「わたしの親友が待っているのだ。たとえそのあと王様に殺されようとわたしは行かなくてはならない」

「メロスな、それ」

「おじいさん、おばあさん。わたしは鬼ヶ島にいつてきます。さあゆくぞ！我が百万の兵よ！」

「桃太郎。でもそんなに人数要らないから。もともと4人でいって制圧出来んにそんなに行ったら鬼達泣いちゃう」

「ひひひ。兎を随分追い越したな。競争中に寝るとは馬鹿なやつめ。あれ？急ぎすぎて少しねむくなつたな。どれ、ここで少し休憩するか。少しだけ。少しだけ。……少し……」

「亀えええええ!!寝るなあああああ!!」

「まあそんなとこだ」

「どんなとこだ」

今の説明で一体何が分かったと？

「こんなとこだ。まあわたしのことだからな、そう言ってる今年一杯いるかもしれないけど」

「確かにな」

こいつあいてに真面目に相手するのが間違いだ。

「じゃあそろそろ僕行くから」

「ああ。じゃあ今度会う場所は法廷だな」

「なんでっ!?!」

……まったく。気分が楽になっちゃったじゃん。

分からない火曜日。 違った価値観（後書き）

別にシリアス展開になったりしませんので。 というか遊喜の性格的にできませんのでご安心を。（?）

芸術的な水曜日。 苦ではない、しかし決して楽じゃない

今日はどうやら芸術鑑賞のようです。(今日知った)

三時間目までしか授業をやらないようです。(いいいいいっほお
おおい!!!)

そして見るのは桃太郎のようです。(小学生か!)

「まあいいじゃん。どうせ授業潰れたんだし」

そう言うのは桂馬。いやあ、今日も見事に僕の心の中読んじやつてるねえ。キミはプライバシーという言葉を知らないのかね?ならば教えて上げよう。

あれ?どういう意味だろ?

「なんか揚げたものだよ。もしくはなんか飛んでるものだよ(てきとう)」

「最初のプライからフライを連想したわけか。相変わらず馬鹿だな

」

「なにおう!」

「正しくは個人の秘密と言いう意味だ」

「ぐっ!」

やっぱり頭いい奴には適わない。

「というか天才君的には授業潰れたのはいいわけ?」

「いや、俺、勉強嫌いだし」
「貴様あ！そこに直れ！！」

勉強嫌いでその成績はあり得ない。

「おいこら、うるせーぞ楽家。もう始まるからちゃんと見とけ」

松戸先生から怒られてしまった。

というわけでここはもう劇場。

ここら辺では一番広いところ。でも600人では結構ぎりぎり。しかも席と席の間が狭いの何の。

あー帰りてえ。

ここ来る前にあまりにも嬉しすぎて授業で当てられた時「桃太郎です」と答えてしまったり、1時間目がおわったらすぐ行くこととしたりしたんだけどそれを書くとき長くなるので割愛。そのころの自分が懐かしくてしゃーない。

「でも大丈夫なの？ここの劇団。だって劇団ランチヨンマツトってふざけすぎじゃない？」

「それ、先月できた劇団らしいぞ」

「歴史浅っ！」

「しかも演目が『桃太郎（改）』だしな」

「あ、本当だ。今気づいた。なんだろう（改）って」
「しるか」

「あ、でももうなんか始まるみたいだねえ」

こうして劇団ランチヨンマット（笑）の桃太郎（改）が始まった。

じー……。

（桃太郎（改）の始まり始まり）（ナレーションです）

『やあ！僕の名前はおじいさん！これから山へ芝刈りに行ってくるぜ！』

おじいさん若っ！

『HAI！私の名前はおばあさん！これからパチンコにいくわ』

おばあさんに関しては英語になっちゃった！というか働け！

（舞台はかわってパチンコ店）

近代的だなおい！

『よっしゃあああ！！大儲けだぜ！』

口調変わってんぞ

『こちら景品の“なんかすげえでかい桃”でございます』

ここで貰うんかい！

『えーやだー。桃嫌い別のにしてー』

嫌いなんだ…。話進まないじゃん。

『いや、これ貰ってくれないと話し進まないんで』

あ、本音言いやがった。

『やーだー。あれにして、この間もらった人体模型』

そんなもん貰ったんかい！それ、いくつも貰ってどうするつもりだ！

『いい加減にしゃがれクソババア！！』

店員切れた。

『はい。……ごめんなさい』

〈家〉

ナレーション 適当になりやがった！

『わーい。今から桃を切っちゃうぞお』

『やつほーい。その意気よ！おじいさん』

なんか無駄にテンション高いな。

『必殺！ 耶麻侘参籠切り！！』

なんか必殺技きたー！

くそのときでて来たのはなんと真つ赤な姿の男の子なのでしたく

真つ赤なのは絶対おじいさんの所為だ。

『くつ！一体なんだ！今の蹴りは！』

ああ、今の斬撃な。

くこの男の子の名前は桃太郎に決まりましたく

なぜだ！？

『ふっふっふ。まだまだだな桃太郎や。このおじいさんが居る限り鬼ヶ島には一歩たりとも踏み込めんわ！』

『くつ！下っ端であるお前なんかに時間を割く暇はないというのに！』

おじいさん鬼側かよ！というか初対面だろお前ら！

『桃太郎パーんち！』

『だからまだまだ弱いと言っただ！技と言っものはこうやれ！妙技！天元鋼凜斬！』

だからおじいさん無駄にかっこいいって！本当に脇役！？

く桃太郎に860のダメージ。残りHP、4く

いやいや！桃太郎戦えや！！お前なんもしてないじゃん！！！！

く鬼ヶ島にあった金銀財宝は、鳳凰たちは卑しくも自分たちのものにしたと言いき張ったのですが、桃太郎はそのすべての財宝を桃太郎の家族のために使ったのだった。めでたしめでたし

いや、鳳凰の意見聞いてやれよ！今回あいつが一番頑張ったんだぞ！！！というかそれでいくと桃太郎本人にも絶対利益あるよな！それを見越してだよな！！

くこれで劇団ランチヨンマッチョ……。劇団ランチヨンマッチョ……。…の演目を終了させていただきます。みなさま最後まで見ていただきありがとうございますございました

最後噛みやがった！しかも劇団名！！

「じゃあ学校もどつたら感想書いてもらっぞー」

無理だろ。

慌ただしい金曜日。 準備

「明日は文化祭です！」

いつものように第二美術室で遊んでいた（今日はカードゲームをやっていた）僕らに、部屋に入ってきた舞ちゃんが突然そう言った。

ああ、そういえば明日だったね。すっかり忘れてたよ。でもそれがどうかしたんだろうか？

「なに二人ともポカンとしてんだコラアアアア！！！」

必殺ハイキック。

「なにすんだよ！！」

「いてーじゃねえか」

僕と桂馬の抗議。

「だーから、結局文化祭準備なんもやってないじゃんって言いたいの。先週の月曜日にやること決めてそれからなんにも進んでないじゃない」

ああ、そういえばそんなこともあったね。やること決めてすっかり安心してた。

「いや、大丈夫だぞ。舞、俺が調べておいてやった」

桂馬がそういった。

「ほんと!?!いつのまに!?!」

舞ちゃんが嬉しそうに言う。

「舞ちゃん、安心して。僕も調べておいたから」

「嘘つくな」

「え?いやっ」

「死ね」

「ごめんなさい!出来心でつい」

だってあんなに嬉しそうにしてたから、つい。でもなんで分かったんだろ?

「だってあなたが、そんなことするわけじゃない」

今のはちょっとへこむわー。

「でも桂馬は本当でしょう?」

「おう。後は書いて貼るだけ」

びっくりだ。いやあびっくりだ。一体いつそんなことをやったのだろっ。

それから僕らは作業にいそしむ。

「ねえ桂馬。これ、明らかに嘘だよな」

作業も中盤に差し掛かったころ、僕は一枚のプリントを桂馬に見せた。

「んー？ばれなきゃいいんじゃないね？」

『突撃！宇宙人に聞いた！政治と金の裏の裏』

「ばれるわ！題名見ただけでばれるわ！ばれなかったらばれなかったで大問題になるけど！というか宇宙人に政治の話の話を聞くなよ！もつと聞かなくちゃいけないことがあるだろ！！」

「あーその点なら大丈夫。難しいこと言ってたから政治の話の部分はカットした」

「だったら題名にも大きな語弊があるじゃねえか！！」

「というか難しいこと言ってたんだ宇宙人。すごいな。」

「でも元総理の私生活を赤裸々に語ってる部分は残してるぞ」
「なんでそんなこと知ってるの！？」

ぼくはそのプリントに目を落とす。

Q、あなたはどこ出身ですか？

A、はい、太陽の黒点あたりです。

「ほら、ここでもうすでにバレバレだもん。太陽に生物住めるわけねーもん。というか黒点あたりってなんだよ。黒点場所変わるよ」

Q、好きなものはなんですか？

A、はい、野球とイカと、あとアニメは八〇ヒが大好きです！

「めちゃくちゃ地球になじんでんじゃねーか。なんだよ大好きです！って。しらねーよ宇宙人役のアニメの趣味なんか」

Q、では、嫌いなものはなんですか？

A、親の仇と、あとは日本の夏ですかね。じめじめして暑いし。

「おいしいいい！太陽住んでる設定はどこ行った！？あれに比べたら日本の夏なんて寒すぎるだろ！というかさつきから幼稚な質問多すぎだ！小学生か！」

こんなのすぐばれるに決まってる。

「ってことでこれ無し」

「えー。せつかく一生懸命考えたのに」

「お前考えたんかい！！」

僕が言うのもなんだけど、馬鹿すぎる。

「ねえ桂馬、もしかしてとは思っけどこれも嘘？もう貼っちゃったんだけど。けどけど」

そう言っって舞ちゃんが持ってきたのは『これが宇宙人の姿だ！』という題名と模造紙に貼られているおおきな写真だった。

今度は結構ありきたりなの持ってきたな。たしかにこういうのだと偽者多いからね。

そうおもってその写真を見てみると、そこに写っていたのは、

僕だった。

「なんでだよ!!!」

「うおっ!どうした遊喜。急に大声だして」

「どうしじゃない!これ完全に僕!桂馬!なんで僕の写真なんかもってんの!?舞ちゃんも気づいて!もしかしてじゃない!完全に宇宙人じゃないから!」

「おお!これは気づかなかった」

「嘘つくな!演技が白々しいんだよ!」

「いや、たしかに人間っぽくないなあと思ったことはあったがまさか……」

「ちがうわ!!!人の話を聞け!!!」

あーつかれる。

そんな感じで作業終了。明日はいよいよ文化祭。

華やかな文化祭。 やっほーい

とうとうやって来ました！

ああこの日をどんなに楽しみにしていたことが！

中学の時とは全く違う至極の祭典文化祭！

そういえば昨日までこのことすっかり忘れてたけどそこは大目に見て！

「おお。すごい」

校門に来たときの僕の感想。なんか煌びやかな飾りがあって、もう模擬店が出ている。これでテンションが上がらないはずがない。きっとこれもつと前からしてあったんだろっけど、僕たち最近正門通って帰ってないから（校則違反です）分からなかった。

「ねえねえどこいくどこいく？」

そう聞くのはやっぱり僕。もちろん聞かれているのは桂馬と舞ちゃん。担任の長い話も終わってやっとこさ自由時間。どうせ僕ら仕事とかないしね。

「うーんそうだな。舞、お前の姉貴んとこなにやってんだっけ？」

「愛姉のクラスは模擬店よ」

「じゃあ今はいかねえか」

「はい。及川先輩たちのクラスは？」

そう言う僕。

覚えているだろうか。美術室に乗り込んできた先輩達。

「おっ！お化け屋敷だって。じゃあ最初はここからいくか」

「いやよ！」

舞ちゃんが叫ぶ。突然なんだろう？

「い、いや、だって、その、こ、混んでそうじゃない！」

なんかもうしどろもどろ。

「いまから行けば大丈夫だろ」

「いや、でも、知り合いにあつたら嫌じゃない！」

「なにが嫌なんだよ」

「えっと、だって、曲がりなりに男子連れてるし、変な誤解されるかもしれないじゃない！」

「んなもんどこ行くこうと一緒だろ。そしてお前今までそんなこと気にしたことなかったじゃねえか」

「でもっ！だって、その…」

ありゃりゃ、だまちゃったよ。でもそんな舞ちゃんも可愛いなあと思う僕は変態でしょうか。いや、そんなはずがない。

そこでふと思いつくことがあった。
率直に聞いてみる。

「もしかして舞ちゃん、恐いの？」

沈黙。

「んなわけあるかああああ!!!」

「ぎゃああああ!!!肩が、肩がはずれるうつつう!!!」

舞ちゃん打撃系以外の技もできたのね。しらなかった。というか知りたくなかった。とくに体で。

「何言つてんの!?馬鹿じゃない馬鹿じゃない馬鹿じゃない!?本物の幽霊ならともかく、いや、本物も恐くないし信じてないけどね!そんな作り物ましてやこんな高校の文化祭レベルのお化け屋敷なんてたかが知れてるわ!どこに恐がる要素があるのかしら!さつぱり全く皆目見当もつかないわ!というか本当は恐いのあんたなんじゃないの!?遊喜!まあ別に私はどっちでもいいんだけどね!遊喜がそこまで言うなら行かないでやらないこともないわよ!!!」

めっさ喋るなあ。こんな喋ったの初めて見る。こんな取り乱したのも。

「そうか恐くないか。じゃあ行かない理由はないな。遊喜、それでいいだろ?」

おっと桂馬の目が光ってる。S発動だ。

「え?あ、うん」

「よし、じゃあ行こうか」
「ちよっ！」

舞ちゃんの叫びも無視して桂馬は歩き出す。僕もついて行く。舞ちゃんも渋々ながら。

ちよっと舞ちゃんが可哀想だ。ここは安心させないと。

「大丈夫だよ。舞ちゃんの言った通り高校生レベルなんだから。そんなに恐いのではないよ」

なんかすごい本格的だった。

そもそも3年1組は校舎を使っていいなかった。新倉上高校には合宿用の、ふつうの民家よりは少し大きめの施設があるのだが、それをまるまる一棟使っていた。

そしてこれだけ頑張ったんだよと思ってしまふような外観。しかも先に入った人だろう。中から大きな悲鳴が聞こえる。

並んでるのは数人だった。

「あれ？吉原さんじゃないですか」

そういう桂馬。見ると、確かに吉原先輩が受付をやっていた。

「おお、桐山桂馬とその他諸々じゃねえか。なか見てくのか？」

その他諸々にすんな。

「そうっす」

「がんばれー。俺も中身知ってるけど、相当頑張ってるぜあいつらやめてください。それ以上言つと舞ちゃんが倒れそうです。」

「おっ、もう順番きたじゃん。じゃあごゆっくりー」

そんな吉原先輩の声が遠くに聞こえた。

「きゃあああ！きゃあああ！ぎゃあああ！恐くない恐くない！こんな全然恐くない！これはただの作り物ほんとはお化けなんていないんだ！きゃあああ！！」

大体ずっとこんな感じだった。

僕らはもとよりお化け役の先輩達も引いていた。

おかげで凝ってるはずのこのお化け屋敷ぜんぜん恐くない。もう少しで終わりだし。

「わ、わん！」

そんなとき聞こえてきたのはよく知っている先輩の声だった。

華やかな文化祭。 やっほーい、その武

どっちらお昼時です。

「じゃあ愛姉のこの模擬店でいいかしら？」

そう言うのはお化け屋敷からの復活に10分かかった舞ちゃん。

「うんいいよー」

というか僕、舞ちゃんのお姉ちゃん見るの初めてだったり。どきどき。

「っーか結構並んでるな」

桂馬の言った通り、お昼時だから結構な人が並んでいた。

「あー30分ぐらい待ちそうだね」

「まあでも他のところもさして変わらんだろ」

それもそうだね。と、僕らはそこで待つことにした。

「おー！舞！やっほー来てくれたんだー！」

そんな声が聞こえた。

そこに見えるは舞ちゃんのお姉ちゃん。この状況だしそうだろう。

「ああ、愛姉約束どおりきたよ」

やっぱり。

「へえ。男二人連れかい。どっちが彼氏？」

「初めましてお義姉さん、楽家遊喜と申します」

「ちよっと！遊喜なに言ってるのよ！」

「何を言ってるんだ舞、もう隠すことはないだろう？」

「調子乗るな」

僕の胸倉をつかむ舞ちゃん。

ごめんなさい。悪気はなかったんです。ちよっとやってみたくなくなっちゃって。

「まあまあとりあえず座ってよ」

「いや、座るところないんですけど」

桂馬の言う通りだ。

「ああ本当だ、ちよっとまってて今席あけてくるから」

そう言うや否や愛さんはどこかに行ってしまった。

ぎゃああああー！！

…なんで悲鳴が聞こえるんだろう？

「よし、席空いたよー。舞たちこっちこっち」

そう言う愛さんの制服は少し乱れていた。

行きたくねー！

「じゃあメニューどうするどうする？ちなみに舞たちは私の権限で全品95%オフにしといてあげたから」

…すみません、とつても気まずいです。特に周りの目が！

「へえ、結構種類あるのね」

こんな状況でもまったく動じない舞ちゃんが、メニューに目を通しながら言う。慣れてるのかなあ。

「うん。ただ安全なのはおにぎりしかないけどね」

「なんで!？」

「まずこのケーキだけど、賞味期限1ヶ月ほど切れてるわよ」

「怖い!そんなの出さないでよ!」

「カレーはさつき間違えて砂糖たっぷりはいっちゃったしね」

「作り直そうよ…」

「麺類全般には一つ一つ丁寧に画鋏がはいってるわ」

「それに関してはただの嫌がらせじゃない!」

「冗談よ」

「ならいいんだけど…」

「すべての料理に毒が入ってるわ」
「犯罪だ!!」

恐かったのでみんなでおにぎりを食べた。

ふむふむ。普通だ。

「舞ちゃん。おにぎりの具何はいつてたー？」

「このおにぎりは中になにが入ってるか気まぐれらしい。せめてそれぐらいは普通にやってほしかった。
僕はまだ具までには到達していない。」

「何かしらね？おいしいけど…なんかねばねばしてるわ」

「舞ちゃんそれ危なくない!？」

「ああ、大丈夫。ただの甘納豆だったから」

「それでねばねばしてたら余計に怪しいよ！出した方がいいって！」

「というか甘納豆入ってるんだ。おにぎりさえ普通に作れなかったんだなこは。嫌がらせとしか思えない。しかも舞ちゃんそれおいしいって、どつという味覚？」

結舞。おむすび旨い。

「はは、なんか駄洒落みたい。舞ちゃんに言ってみよう。」

「ねえ舞ちゃん、むす…」

「それ以上何も言っな」

「はい…」

くっ！流石舞ちゃんだ！事前に僕の言うことを言わさないとは！

「うげ！」

「どうした桂馬！」

もしか、またおにぎりに変な具でもはいていたんじゃないか？

「具が……」

やっぱり。桂馬のはなんだろ？チョコレートかな？飴玉かな？

「ない……」

「無いの！？そんなの有り！？どれだけ嫌がらせしたいんだよここは！」

うわー。食べる気なくなってきた。どうしよう、でもたべないと愛さんに顔向けできないしなあ。それにさっきから舞ちゃんがすごい顔で睨んでるしな。仕方ない。ここは勇気を振り絞って！

「えい」

食べた。

「うぎゃあああああああああ！！！！」

画鋏！？最早食べ物ですらないし！というか麺類は避けたのに！これならまだ何も無いほうが良かったよ！というか普通に警察沙汰だ！！

いたいよー。僕は画鋏を何とか引き抜き水に入っていた氷で冷やす。

その間桂馬たちは雑談していた。ちくしょうめ。

それでその後はお会計をしてから（おにぎり100円だったので5円になった。そこは冗談じゃないのか）僕はまた学校をぶらぶら歩く。

ん？なにやら中庭に人が沢山集まってるぞ。なんだあれ。

「ああ、そういえば腕相撲大会だったけな。どうだ出てみれば？」

そういう桂馬は出る気がないらしい

腕相撲大会とは、あれ？説明要らない？でも言わして。言いたい気分なの。

腕相撲大会とは、毎年ここの高校で行われているイベントの一つである。まあ普通の腕相撲なんだけどね。目新しいものはないよ。でも結構人気だったり。

「うーん。めんどくさそうね」

「なんか優勝賞品あるらしいぞ」

「やるわ」

物欲激しいな。

「そのかわり遊喜もやりなさい」

どの代わりだよ。僕がめっちゃくちゃ損してるだけじゃないか。

「え？何で僕も？嫌だよ。すぐ負けることは目に見えてるし」

「1回戦赤コーナー楽家遊喜！」

アナウンスが流れる。

……だってあんな目で見られたら（睨まれたら）仕方ないじゃないか。

でも勝てないよな。生まれてこの方運動と呼べるものは毎日の登下校しかやったことがない。体育すらサボっていた。

「青コーナー。ヒョロ田やわ夫！」

なぜだろう？勝てる気がしてならない。

「「おらああああ！！」」

勝った。でもすごい接戦だった。決め手は僕が相手の足をふんづけてたことだろう。え？反則？ばれなきやいいんだよ！

それから僕は勝ち続けた。今度は僕は卑怯な手は使っていない。ただ舞ちゃんが対戦相手をすぐ睨みつけていて相手の戦闘意欲がほぼ皆無になっていたが、それはそれ。あんまり関係ないだろう。

もちろん舞ちゃんは言うに及ばず。

結局決勝は僕と舞ちゃん戦になった。

勝てる気しねー！

ほら、舞ちゃん見るからに本気だもの。指とかバキバキ鳴らしちゃってるし。女の子がそんなことするんじゃないやありません！

「ふっふっふ。いつかあんたとはこういう日が来ると思ってたわ」
「…僕はこんな日が来ないでほしかったかな」

命まで削り取られそうな気がするし。

「じゃあわたしも殺す気でいくからあんたも殺す気できなさい」
「いや、僕も半分の力でいくから舞ちゃんも1割の力でやってよ」

まったくフェアじゃない。でもそれでも負けるかもだ。

そもそも僕が舞ちゃんに力勝負で勝てたためしがない。重い物を運ぶ時とか舞ちゃんに手伝ってもらってるぐらいだ。男としてそれはどうかって？そんなプライドとっくに捨てたわ！

「始め！」

どうしよう始まってしまった。

「おらああああー！！」

二人同時に気合を入れる。自分では見えないが、きつと僕の顔は真っ赤だろっ。

いける！！なんか力が漲ってきている気がする！

そんなわけなかった。

勝負は2秒。もちろん舞ちゃんの勝ち。あー腕が痛い。

そんな感じで文化祭は終了。

華やかな文化祭。 やっほーい、その忒（後書き）

初めての2話完結。 どちらにしろ短いですけどね。

ひさしぶりの水曜日。 再会

今日は天気がいい。なぜかいつもより早く起きたし、何か良いことがありそうだ。

そう思いながら僕はいつもの道をいつもより少し早く歩いていた。

「やつほ~~~~~!!!楽~~~~~!!!ひつつさしぶり~~~~~!!!」

前言撤回。すぐ帰りたい。

「ちょっとづるさいよ、ご近所さんに迷惑ですよ」

そう言って振り向く、そこに居るはずの少女に向かって。

あれ？誰もいない？あるのはいつもの通学路。それに空中にある足だけ。

つて足？

「ぐはあ!!!」

顔面に衝撃が走った。こいつジャンプ力半端ねえ。

「なんでいきなりまさかの跳び蹴り!？」

「いやあまさか餡子ちゃんもあそこまで綺麗にきまるとは思ってたな
かったよ。いやあ褒めるな褒めるな」

「褒めてないよ!!!」

「あれ？じゃあなんでそんな大声を？」

「詩杏の所為だ！！」

「もしかして弟子入り？いやあ困っちゃうなあ」

「なんとというポジティブシンキング！！」

あー疲れる。

この子の名前は、おおたはらしあん大田原詩杏。無駄にテンションの高い女子。背はすげえ小さくて140あるかないかぐらいで、それを誤魔化すかのように髪は尻あたりまでとすごく長い。知り合ったのは中学の時からだけど僕に異様に懐いてる。

あと一人称は餡子ちゃん。自分で自分にあだ名をつけるな。

「にしてもほんと久しぶりだな。確か前学校に来たのが夏休み終わってすぐだったからかれこれもう2ヶ月会ってなかったのか」

一個言うの忘れてた。こいつ不登校児で、中学の時からそうだったけどほとんど学校来ない。入学式から数えても来たのは数えるほど。(入学式も来なかったけど)ときどき思い出したようにふらりと学校にくる。なんなんだ。

「んー？でもでも、いつつもメールしてるじゃん。文化祭の前だったさ」

「ああ、そういえばそうだったけ？」

「そうだよ！酷い！もしかして内容まで忘れたとか言わないよね！？」

なぜか必死だった。

うーん。なんだっけか？思い出せない。ここまで言うんだからそれ

なりに大事な話だと思っただけど。

「『お腹空いた』だよ!!!」

見かねた詩杏が答えを言った。

…で？それがどうかしたのか？今思い出したけどそれ、なんて返して言いか分からなかったからスルーしたやつだ。

「それが餡子ちゃんのSOSのメッセージだったんだよ!!お兄ちゃんは帰ってこないし、冷蔵庫の中身は飲むヨーグルトと魚肉ソーゼージしかないし、餡子ちゃんのお財布の中には今42円しか入ってないんだよ!!」

「ああ、ごめんなさい」

なんか謝らされた。

ちなみに詩杏は兄と二人暮らし。兄はあんまり家に居ないらしいが、詳しいことは知らない。

「というわけでなんか奢って」

「だから学校来ようとしたのか」

登校中に僕に会ったのは幸い。僕にとっても。詩杏に弁当食われずにすんだ。

と、ここでへなへたと詩杏が座り込む。

「もう駄目、餡子ちゃん一步も動けない」

「いや、さっき跳び蹴りしてきたじゃん」

「お腹がすいて死にそうだよ」

「いや、だから、さっき」

「あーもー、楽ーおぶってー」

「いや、詩杏、高校生なんだから」

「やーだー!」

「……」

「で何にする?」

僕は背中 of 詩杏に聞く。「ここは近くのコンビニ。」

「全部」

「無理にきまってるだろ」

こうしているとまあ兄妹に見えるからいいか。詩杏小さいし、いや、兄弟かな? 詩杏の服装的に。

「なあ? 詩杏?」

「ん? なあにお兄ちゃん?」

「お兄ちゃんって言うな!! まあその、なんで学ランなんて着てんだ?」

詩杏の服装は所謂学ラン。僕も詩杏のことは人より知ってるつもりだったがこれは驚き。

だから跳び蹴りの件で、パンツが見えちゃった、きやつ。みたいな

話が無かったわけである。

「あ！あれがいい！」

「無視すんなよ。まあいいか、ってこれでいいのか？」

「うん。今は質より量だよ！」

詩杏が選んだのは食パン6枚切り（当たり前だが調理前）こんな
生で食ってる奴みたことないよ。

「もふもふ。ああでもあれ楽蹴るには丁度良かったしね、もふもふ。
ナイスあの時の餡子ちゃん。もふもふ」

「ああもつ、喋りながら食べるな。僕の肩に食べかす落ちてるじゃ
ん」

詩杏は未だ僕の上。いい加減降りてくれないかなあ、店員さんにも
白い目で見られたし。

「ほらもう高校着いちゃうし、降りて」

「えー面倒」

と、言った途端僕の背中が軽くなった。なんだ？こいつは日本語の
意味を正しく理解してないのか？それともただの天邪鬼か？

「きゃっほーい！！舞、舞、久しぶりー！！！！」

そう言って舞ちゃんに抱きつく詩杏。ああそう言うことか。ともあ
れ、降りてくれて助かった、このまま教室になんて死んでも行けな

い。

「詩杏じゃない！本当に久しぶりね！今日はどうかしたの？そしてなんで男の制服なんて着てんの？」

「えとね、今日はお腹空きすぎて楽になんか貰うためにきたの。あと服は餡子ちゃんの制服どっかいつちゃったからお兄ちゃんのくすねてきたの」

ああ、どうりででかい訳だ。でも、それにしても大きすぎないか？僕より相当でかいなそのお兄ちゃん。

校舎に入った詩杏は明らかに人の目を引いていた。その小さすぎる身長と大きすぎる制服と長すぎる髪の毛のせいだろう。どっかでバランズ取ればいいのに。

「ていうか詩杏、目的果たしたでしょ。もう帰んなくていいの？」

「ん？ああ。せっかく来たんだし今日は居る」

「そっか。でもお前確か2組だろ？自分の教室行けよ」

「そんな硬いこと言わないでよ。ちよつとぐらいいいじゃん」

「うん。別に僕もこれが休み時間とかだったら文句いわないよ。でも今授業中だし」

そう今はばつちり授業中。しかも詩杏は僕の隣で床に体育座りしてしきりに話しかけるもんだから迷惑で仕方ない。

おかげで寝れないじゃないか！！

「ええと君はこのクラスじゃないよね。というかウチの生徒？なんで床に座ってんの？というか君女だよな？男だとしてもその制服はどうかと思うよ。大きすぎる」

先生も混乱していらっしやる。

でも結局どっかに入ったみたいだ。帰ったか保健室かどちらかだろう。まあどちらでもいい。僕は深く眠りについた。

ひさしぶりの水曜日。 鮎子ちゃんね

結局戻ってこなかったな。

そんな風に思いながら僕は階段をのぼる。

今日はもう放課後だ、桂馬は委員会の仕事してるし舞ちゃんは詩杏を探しに保健室によってから来るつもりらしい。僕も行くことと思っただけど止めた。無駄だと思ったから。

なぜなら。

キリキリキリミン。

「やっぱり居たか。おーい、起きろお前机に涎ついてるじゃないか」
第二美術室の机をベッド代わりにして熟睡していたのは、ダボダボの男子の制服を着た髪の長い少女だった。

……ドアの開閉音にはもう突っ込まない方針で。というかみんな気づいた？

「んにゃー。あと5分……」

べたなこと言いやがって。

「せめてその涎拭いてから寝て。ほれ、拭いてやるから顔上げて」
なんか詩杏と居ると調子狂うな。お兄さんやってるみたいだ。

「にやにゆあにえーによ…」

「せめて日本語しゃべって」

「うるさい、馬鹿、黙れ、死ねカス」

「思わぬ罵倒！！」

絶対さつきと言ってる事ちがうでしょ。

「むにやにやにや…」

まあいいか。このまま放っておこう。さて、僕は最近僕の中で流行ってるトランプタワー作りに勤しむとしよう。
めざせ7段！

おお、あと少し…。

ピビヤードンチャー

言わずもがな扉の開く音。ああ、どんどん変になってく。

「あれ？遊喜だけ？って詩杏！ここに居たの！？最初に言ってよ、
もー」

あぶねー！崩れるところだった。

「ちよつと舞ちゃん、静かに頼むよ僕今繊細な仕事やってんだから」
「詩杏ー起きなさいー」

また蹴りを食らってしまった。

「なんなの？もう。餡子ちゃんくすぐられるの駄目なの知ってるくせに。なんか用事？」

そういえば特に用事は無いな。隣を見る。舞ちゃんも別に用事があったというわけではないらしい。

「餡子ちゃんの安眠を邪魔したんだから並大抵の用事じゃ駄目だよ。せめて太陽が地球に衝突するってレベルじゃないと」

「流星にそこまでの用事はなかなか無いぞ！！」

それにもしそれで起こされたらお前に何ができんだよ。

「うーん。ダンスでも踊ってあげようか？」

「それで地球が救えるか！」

「でもみんなの心は癒せませす」

「現実逃避以外の何物でもないな」

「でも餡子ちゃん、リンボーダンスぐらいしか出来ないけど」

「それはダンスじゃありません！」

「知ってるよ、だからあれでしょ？鉄棒とかの下をこう膝を曲げて通る奴」

「おいしい！そういうの小学校のときとかやってたな！」

鉄棒ってえらく難易度下がったな。お前の身長なら特に。

「いや、あれはれっきとしたダンスだったはずだけど」

「わっ！」

「ひゃっ！」

「わひょーん」

上から僕、舞ちゃん、詩杏。詩杏絶対驚いてないだろ。

「桂！久しぶり！わー！」

「いや、朝に教室であつたけどな」

「桂馬、いきなり出てこないでよ。びつくりした」

ちなみに詩杏は仲がいい人ほど呼ぶ文字数が減っていく。例えば僕なら最初が『楽家遊喜』で次が『遊喜』で仲良くなると『楽』だ。どの文字がチヨイスされるかは詩杏次第。

「お前らがしゃべっててこっちに気づかなかつただけだろ」

「だっけ？」

「そつだよ」

全然分からなかった。

「で？なんだっけリンゴダンスの話だっけ？そもそもリンゴダンスの起源はだな……」

「ああもついいから、その話は終わったから。あと、説明しようとするなら名前間違えてんじゃねえよ」

リンゴダンスな。

「そついえば詩杏、お前ここ居ていいの？部活なんだっけ？」

桂馬が聞く。

この高校は部活か同好会に絶対入らないといけない筈。それはたえ不登校児でも同じだろ。

「サッカー部だよ」

「なんでそんなアグレッシブな部活入ってた!?」

「ちなみに中学時代は野球部」

「想像もできなねえよ!」

うん確かに、でも大方、肩書きだけでもかっこよくしたいって思ってたんだろ。ブラッ○ジャック先生とは大違いだ。

「ああでも今日在籍をこの同好会に変えたから。よろしくう」

詩杏がニヤリと笑った。

ひさしぶりの水曜日。 鮎子ちゃんはね（後書き）

もう少し新キャラでる予定です。

納得の金曜日。 僕の発見

僕たちはいつもと変わらず第二美術室にいた。

そしていつもと変わらず将棋をしている。

「詰み」

僕は言う。

「なんでだあああああ!!!!」

桂馬が叫ぶ。一体どうしたんだろうか？

「おかしいだろ！なんでいきなりお前強くなっちゃってんの！？前回俺勝ったじゃん！しかもすげえ大差で、なのに何これ！？まだ始めてから十分しか経ってないじゃん！お前なんでいきなりそんな強くなっただよ！まさか俺と同じように囲碁・将棋部に弟子入りでもしたのか!？」

桂馬、そんなことしてかのか。

「まさか。普通にやっただけだよ」

「んなわけあるかあああああ!!!!」

キレられてしまった。

「桂馬、諦めなさい」

と、ここで舞ちゃんの声。

「遊喜はね、遊びやゲームでは絶対に負けないわ。ただルールを覚えるのが圧倒的に遅いだけ」

「いや、今までだって普通に出来てたじゃん」

納得できなさそうな桂馬。そりゃそうだ。

「ねえ遊喜、昨日お父さんに何か将棋についてアドバイスもらった？」

「え？うん」

確か昨日父さんに桂馬に将棋勝てないよって相談したんだっけ。

「えっと、たしか『将棋はな、王将以外もとっていいんだぞ』って。今日はそれを意識してみた」

「なるほど、流石遊喜父」

「んなもんルールですらないじゃないか！」

「だから遊喜なのよ。圧倒的に馬鹿」

「ひどい！」

せつかく勝ったのに嬉しさ半減。

「ああ、私もこいつに缶蹴りで何度鬼をやらされたことが。いつつもわざと最後の一人になるんだもんな遊喜はそれで私は鬼の無制限ープ。なんか思い出したら腹立ってきた…」

「ちよつと舞ちゃん？それ小学校の時のことだよな？そんな昔のこと今持つてこられても困るんですが」

「中学の時も大富豪、いつつも私大貧民だったわよね？…。あれ？

遊喜、私のこと嫌い？…」

「いやいやいや！違います違います！それはたまたま！偶然！まさか大貧民まで操作できるわけ無いじゃん！」

嘘です。

ごめんなさい。日ごろの憂さ晴らしをしたくて。

「この鬼畜がああああ！！！」

そう言って殴ってくる。

「ちゃんと人の話を聞いて！！あと、この光景完全に舞ちゃんの方が鬼だから！だから殴るのは止めてください！！！」

いつのまにか敬語になっていた。

というか校内で暴力事件発生してんぞ。止める桂馬。

「まあまあ落ち着け舞」

そう言って桂馬が止めに入ったのは僕がもう動けなくなってからのことだった。

おせーよ。

まさか桂馬に将棋勝っただけでこんな事になるうとは。アンビリーバボーだ。むやみに勝つもんじゃないな。

「まあとりあえずお前らお二人に聞きたいことがある」

そう言っているに座る桂馬。舞ちゃんも同じように座る。僕は床、動ける状態じゃない。口は動くけど。

「なんでそんなびつくり情報を今まで黙ってた」

桂馬とは中学からのお付き合いなので僕と舞ちゃんのことについて知らないことも多かったり。でもまあ、なんでもって言われても。

「別に隠してたわけじゃないからねえ。だってもう中学になると缶蹴りもしないし。でも大富豪強かったことは知ってたでしょ？何回か一緒にやってたんだし」

「それに説明めんどくさいのよ」

「初期設定では無かったしね。だいたい文化祭ぐらいかバベツ!?」
舞ちゃんに頭を蹴られた。僕は床に寝てたから踏んづけるように、
というかまんま踏みつけていた。理不尽な攻撃パート?だ。

「じゃあもう一つ。なんで遊喜この同好会作っただよ。だったら将棋でもなんでも極めれば良かったじゃん」

「ああ、真剣勝負とか大会とか緊張しちゃって無理」

あと舞ちゃんいい加減足を離してほしい。

「……役に立たなっ」

「だから遊びで限界だよ。そういう意味では楽家遊喜の名に恥じないね!」

「なんでテンション上がってたよ」

「まあでもいいんじゃない?知ってても知らなくても基本同じだし。ルールさえ覚えればとか言ってるけどそのルール完全に覚えてるゲ

「ム10も無いと思うし」

言いながら舞ちゃんが立ち上がる。どうやらもう下校時間のようだ。

「ん。まあそれもそうか」

桂馬も帰る支度を始める。

「あつと、僕まだ体動かないんだよね。舞ちゃんの所為で。だからせめて帰るなら僕を保健室まで連れて行ってほしいかな。できれば家までを頼みたいけど二人とも方向違うからせめて保健室まで」

二人の姿はもう無かった。

「あーもう!」

納得の金曜日。 僕の発見（後書き）

そろそろプロフィール書きたいと思います。え？遅い？そんなの気にしません！

楽家遊喜 ラクヤ ユウキ

身長 162cm

体重 50？

趣味 ゲーム（得意不得意に限らず）、お喋り

好きなもの 楽しいこと、楽なこと、枝豆。

嫌いなもの 嫌なこと、苦しいこと、面倒なこと、ちっこい生き物。

ばらばらの月曜日。 カウンセリングルームの謎（前書き）

やっぱり前書きに書きます。
優柔不断ですみません。

桐山桂馬 キリヤマ ケイマ

身長 177cm

体重 59?

趣味 意味の無いことを考えること

今欲しい物 死神の目

好きな言葉 堂々巡り

ばらばらの月曜日。 カウンセリングルームの謎

北校舎、一階、保健室の隣。そこに僕らの学校のカウンセリングルームがある。

まあカウンセリングルームといってもカウンセラーは暫く前からこの学校に居ないようだし、誰かが使ってるところも見たこと無い。つまりは忘れ去られた部屋。である。

そんなところに僕は呼ばれた。
逆夢夜行に。

いきたくねー！

そう思つてスルーしようとした。

しかしそうは問屋が卸さない。放課後。

『えー。1年5組楽家遊喜、楽家遊喜、今すぐこいや。じゃないとお前の恥ずかしい過去をばらします。えーと確かあれは去年の春に…』

こんな校内アナウンス聞いたことねえよ。

「というか何も言うな！なんで僕の過去知ってるかは置いて何も言うな！今殺しに行くから待つてろ！」

そんな声が届いたかどうか知らないがとりあえずアナウンスは止まった。

助かった。

『あ、やっぱり話すわ』

「あの野郎おおおおお!!」

僕は走る。少し周りの目が気になるが。

「おい……夜行……どういうことだ……」

僕はカウンセリングルームに居た夜行に呼びかける。ただ走ってきたため呼吸が辛い（ここに来る前に職員室と放送室行った）

「あの放送のこと？そりゃ楽家くんわたしの頼みごとだと来てくれなかったかもしれないしね」

「だったら直接来い！ここに来るまでに僕は16回の失恋経験を持ち、なおかつロリコンな男にされてしまったじゃないか!!」

「あながち間違っではないだろ？」

「間違いだらけだ!!」

とつか正解がない。

「あれ？おかしいな。まえ楽家くんが小学生女子に男子の学生服着せておんぶしてたのを見たんだけど、あれ、妹さん？」

「いや、妹ではないが一応あいつ高校生だから……」

見られてたか……すげえ恥ずかしい。

「成る程。つまり楽家くんは男装した女の子が好きだと」
「違う！断じて違う！」

僕にそんな趣味は無い。あとロリコンでもない。

「でもあれだね。話変わるけどわたしのことは学校では田中先生で頼むよ。一応まだそれで通してるんだから」

「ああ、前から聞こうと思ってたんだけどなんで偽名なんて使ってるんだ？僕には普通に教えたのに」

「だって本名とかなんか恥ずかしいじゃん」

…理解できない。

「それに“逆夢夜行”が本名とは限らないよ。実際、職変わるたびに名前変えてるからね。本名忘れちゃったかも」

「お前、犯罪者かよ。ちなみに今までどんなのあつたんだ？」

「不徳、号傳鎖、黄泉子、富男、セラファイ、22番、さじ、物非スンス、網美、福井翔、カリア、小舟、旋廻、たかな、啓。だったかな？全部覚えてるわけじゃないけど」
「すごっ！いくつ仕事変えてたんだよ」

というか女の名前とか外国人とかあつたじゃん。どうしてたんだよ。

「じゃあここ来る前は何してたんだ？」

「赤い帽子かぶって配管工」

「マ〇オ!？」

「もしくはグラスンかけて仕事してない駄目人間」

「マ〇オ!？」

あ、伏字をしたら同一人物のようになってしまった。まさかのおっさん達が一字違いだったとは。

「というか仕事してない奴に偽名も何もないだろ」

「そんなことないさ、わたしは自分の物に名前を書く時でも偽名を使っている」

「お前それ自分が損してるだけじゃん！」

ぜったい落し物返ってこないよ。

「あと学生時代はテストでも」

「0点だろそれ！」

学生時代からそんな奴だったのか。関わりたくないな。

「まあ冗談はこころ辺にして」

そう言う夜行。お前の所為だ。

でも確かに無駄に時間とってしまった。はやく美術室に行きたいのに。

「お前に頼みごと」お断りします」

夜行が全部言うまえに答えた。こいつの頼みごとなんてロクなことじゃないだろう。

「いや、まず話だけでも聞けよ」

「お断りします」

「そういわずにさ」

「時給3000円でどうだい？」

「やりましよう」

しまった、つい口が勝手に。

「おおそうかいやってくれるかい。じゃあくわしい内容は来週にでも伝えるから」

そういつて早くも消えてしまった夜行。

「おい……」

僕が取り消そうと思った時にはもう居ませんでしたとぞ。

驚きの水曜日。 なんじゃこりゃあ！（前書き）

パート？

結舞 ムスビ マイ

身長 158cm

体重 知ったら殺すわよ。

趣味 タコ殴り（主に遊喜）

得意な技 飛び蹴り

トラウマ 女子から告白されたこと

驚きの水曜日。 なんじゃこりゃあ！

なんか落ちてきた。

急に視界が真っ暗になった。

「なんじゃこりゃあー！」

「いや、いきなりそんなこと言われても
「取って！これとって！」

僕は隣の桂馬に頼む。今は登校中。

「いやあ、俺猫苦手だし」

これの正体は猫か！多分木からでも落ちてきたんだろう。

「ぶはあ！」

結局自分でとった。桂馬の役立たずめ。

みると、それはとても小さな黒猫だった。なかなか可愛いじゃないか。

「がぶっ！」

「ぎゃあああああ！」

噛まれた。

前言撤回。やっぱりこいつ憎らしい。

「おお、なかなか可愛いじゃないか」
「おい桂馬、それどこで判断した!」
「にしてもこいつ野良かな?」

無視かい。

「うん?そうじゃない?首輪とかもないし」

「へえ、じゃあお前飼ったら?」

「なんでだよ」

「いや、完全にお前に懐いてんじゃん。ほら頭」

気がつけば僕の頭の上でその黒猫がすやすやと眠っていた。猫が黒いから遠目から見ると頭がでかい人みたいだな。

「うーん。家じゃ飼えないんだけど、このまま捨ててくつてのものなあ」

「じゃあ学校で飼える奴探すか」

「それがいいかもね!」

そろそろ学校だし。

「おっはよー舞ちゃん。時にこの猫いらない?」

「おはよ、なにそれ?というか学校に連れてきて大丈夫だったの?」

「うん、鞆のなかに隠してたからばれてない」

もちろん動物を持ってきてはいけません。

そんな感じで和やかな朝の風景。

「ぶわっつつかむおんがー！ー！ー！ー！ー！ー！」
「いだいー！」

そう言っつて僕の頭を殴りつけたのは新学級委員長、ひぎりせんが碑霧千駕さん。
あれ？登場シーンで僕に攻撃する人多くない？特に女子。

「というか碑霧さん、なんて言っつてるか分かりづらい」
「そうか？バカモンがーと言っつたんだけど」

どこの部長だよ。

「そんなことより楽家遊喜、学校に動物持ってきてんじゃねえよ。
先公にみつかつちまっつたらあたしが怒られんだかな」

その口調どうにかなんないかなあ、一応女の子なんだし。

「まあちよつとぐらいいいじゃん。飼い主居なかつつたらこいつ可哀
想だろ？」

ここで桂馬の助け舟。

「そうですよねっ！あたしもそう思いますっ！」

……ああ、勘違いしないでね。これも碑霧千駕だから。

どうやら碑霧さん、桂馬のことが好きらしい。だからあからさまに

態度をかえる。僕らにはツンツン、桂馬にはデレデレという今世紀一番迷惑なツンデレをしていらっしやるお方だ。碑霧さんも舞ちゃん同様恐いから、クラスの誰もいえないけど。

「ついことで楽家遊喜、あんた購買行ってきて牛乳買ってきなさい。もちろんあんたの金で」

「え？やだよ」

ゴスッ！

「……行ってきます」

なんで僕の周りには暴力的な女の子しか居ないんだろ？うつ、お腹痛い。

僕が帰つてくると教室が騒がしかった。あの猫のせいだろう。

「やっぱりここはノラだろ」「いやいや、クロでしょ」「蝉男がい」「ここはパトラッシュにするべきでござる」「なあ、そのケチャップとって」「じゃあケチャップは？」「クリをお願いします」「ここは公平にガンデンヴァルト・エカチェリーナで」「……じゃあそれで」「」「」

多分猫の名前を決めていたのだろう。それにしても…

「突っ込むべきところ多過ぎだろうがよ！……！」

最初はスルーしようと思ったけど出来なかった。

「まず猫に蝉男って付けんじゃねえ！完全に蝉の名前だろ！たとえ蝉の名前でも適当感丸出しじゃねえか！あとなんでウチのクラスに忍者が居るんだよ！そして猫の名前付けろって！それ犬！それにケチャップほしい奴は話に入ってくるな！ホームルームも始まる前になんでケチャップ必要なんだよ！そのあとの奴はケチャップに影響されてんじゃねえ！お前はただ発言したかったただけだろうが！あとエカチエリーナのどこが公平なんだよ！どこにも何の要素のないじゃん！他の奴等も同調するな！じゃあそれで、じゃないわ！！！」

ゼーはーゼーはー、疲れた。一度の台詞で200文字以上しゃべってしまった。

「んだよ、冗談だよ」

不機嫌な声の碑霧さん。いや、怒りたいのはこっちだよ。

「桂馬くんっ、この子の名前私たちから1文字づつ取って千馬でどうかしら？」

態度変わりすぎだろ、というか1文字づつ取る理由がわからん。お前らの子供じゃないんだから。

ちなみに碑霧さん基本呼ぶ時はフルネーム。桂馬は例外。

「パンがいい」

「は？」

僕の飼ってきた牛乳、そして誰があげたか多分その人の昼食であったらうパンをおいしそうに食べている猫を見ながら、桂馬が言った。

「そいつの名前パンがいい」

いや、いくら碑霧さんと桂馬の子供ですみたいな名前は嫌でもさ、それは流石に安直過ぎるんじゃない？
僕がそう言おうと思った時、

「いいねっ！それっ！流石桂馬くんっ！」

ああ、碑霧さんの中ではアリなんだ。いや、桂馬が言ったのならなんでもアリか。

「あれ？名前決めてるってことは飼い主決まったの？」

「ああ、決まんなかったから教室で飼うことにした」

「えええ！？大丈夫なの？」

「何とかなんだろ」

軽く言う桂馬。

またみんなで話し合ってるみたい。今度は住処かな？

ちなみにその後。

全力の金曜日。 ころでなくっちゃ (前書き)

パート?

大田原詩杏 オオタハラ シアン

身長 143cm

体重 36?

趣味 ネットサーフィン、お喋り

宝物 パソコン、小学校の頃拾った赤い石

好物 砂糖の入りの物、蛙、お酒

なつてこない？」

「思わない。詩杏が友達と遊んでなかったのはただ学校に来てなかっただけだろ、そしてずっと一人で遊んでただけだろ。あとそういうことは休み時間とかに言おうか」

そう、今は授業中。ほら、古文の先生が戸惑ってらっしゃる。

まあ学校に来るだけでも大きな進歩か。最近は週に3回ぐらいは学校に来る。遅刻、早退は当たり前だけど、今日だつてついさっき来たのだ。

「というかお前の気に入ってるその猫と遊べばいいだろ。ほら、トモダチ、デキテヨカッタネー」

「何その投げやりな祝福！というか狐だけじゃ頭数足りないからこっちは来てるんじゃない！」

ここで気になるワード。

「狐って、その猫？」

確か桂馬が名前つけたはずだ。僕は忘れたけど。でもなんにせよまさか猫に狐とは付けないだろう。僕の聞き間違いさ、新しい友達でも出来たんだろう。少し寂しいが詩杏が友達増えるに越したことは無いな。ああ良かった良かった。

「うん。そうだよ」

そうだったんかい。

「辰王 参門扉 狐火で、狐だよ」

「随分大層な名前付けやがったなあ！辰でも門でも狐でも無いじゃねえか！？」というかどこが名前どころが苗字！？」
「参門扉が苗字で狐火が名前。辰王は職業名だよ」
「職業名！？じゃあこいつどっかの王様なのか！？」
「そう、龍の中の龍。その名は辰王！！」
「黒猫だけどね！！」

ああ、今授業中だったことを忘れずに。というか僕も今の今まで忘れてただけだ。

キーンコーン

「お、授業終わったじゃん」

「放課後だね！よし遊ぼう！他にも桂とか舞とか呼んでさ！」

「まあ今日の活動ってことで良いか」

僕は諦める。まあ詩杏につかまったから仕方ない。

「ちよつと詩杏、私のほうに来てくれても良かったじゃない」

「あと、うるさい」

舞ちゃんと桂馬だ。

「桂馬くんっ！今日一緒に帰らないっ？」

ああ、あと碑霧さん。

「悪いな、先約だ」

そう言っつて詩杏の方を向く桂馬。

「だろ？」

「うん！」

「な、なにをするのかしら？ 場合によってはこのあたしも参加してやらないこともないわ」

ちなみに碑霧さんは水泳部員。ただでさえもうこの時期はプール使えないのにうちの学校プール壊れてて使えないから市民プールとかを借りてやっている。だからこの時期は基本筋トレか休み。時々室内プールらしい。さつき碑霧さんから聞いた。

「なあ楽、何これ？」

そういえば碑霧さんと詩杏は初対面か。でも誰？ だろ。

「碑霧千駕さんだよ。このクラスの学級委員。で、この子は2組の大田原詩杏」

僕が二人を紹介する。

「ああ、この子小学生じゃなかったのね」

「……よろしく、碑霧千駕」

早くも険悪ムード。多分千駕さんはさつき桂馬と帰れなかったから不機嫌なんだろう。でもそれ桂馬予定無くても断ったと思うけど。

「まあ、紹介はこれぐらいにして、千駕もやるんでしょ？ 何して遊ぶの？ 詩杏決めてる？」

場を取り持つように舞ちゃんが言う。

「あ、うん。さっきジュース飲んだから缶蹴りにしようかと」
「嫌よ」

間髪入れず舞ちゃんが突っ込む。きっと小学校時代を思い出したのだろう。

「え？じゃ、じゃあケイドロは？」

詩杏が不安そうに言う。はて、なんだそれ。

「いいんじゃないか？」

「桂馬くんがいいなら」

「はて、なんだそれ？」

「遊喜が知らないならいいわよ」

僕以外は満場一致。僕は詩杏の講習を受けることに。その間に美術室へ移動。

だいたいのルールこんな感じ。知ってる人は飛ばしてね。

まず、警察と泥棒の2チームに分かれます。泥棒チームが逃げて警察チームが追いかけます。つかまった泥棒は刑務所といわれるところ場所に連れて行かれます。もしつかまっても仲間の泥棒からタッチされれば逃げる事が出来ます。でも全員つかまってしまったら警察の勝ちです。

「ああなんかやったことあるようなないような」

「それよりチーム分けどうする？5人だから泥棒3か？」

「失礼な、狐もいるよ」

「あ、舞ちゃんだ。わーい」

「あんたもう捕まったの？早すぎない？」

どうやら舞ちゃんは捕まった人を見張る役割をしているようだ。

「いやあ詩杏がなかなか速くて」

「でも女子じゃん。まして運動もロクにしてない不登校児じゃんなんで負けるのよ」

「日ごろの成果かな？」

「なんのだよ！」

「じろじろ」

「確かにな！否定は出来ない！」

「でも運動してるつもりだったんだけどな」

「嘘吐き」

「嘘じゃないよ。例えば本棚から漫画をとる運動とか、地球環境について思考を巡らす運動とか」

「そんなんで運動になるんだったら誰もダイエットしないわ！せめて登下校ぐらい言え！というか2つ目なんかもう指一本たりとも動かしてないじゃないの！！」

「目に見えることだけが必ずしも運動ではないんだよ」

「いや、そんなことはない」

舞ちゃんと話をしながら数分後。

「よお」

「おっ桂馬。詩杏と一緒に捕まったね」

「うん。餡子ちゃんと狐のナイスコンビネーションだよー」

詩杏が答える。詩杏の頭には猫が居る。

「あれ？でも碑霧さんがまだだよ。何で戻ってきたの？」

「もう桂馬さえいれば大丈夫だから」

そう答えたのは舞ちゃん。

おもむろに桂馬の首に手を回す。

「ねえ桂馬、この後一緒に遊ぼうよ。もちろん二人で」

桂馬はあからさまにめんどくさそうな顔。

「それ以上桂馬に近づくんじゃねえ！」

おっと、颯爽と碑霧さん登場だ。どこに隠れてたのかね？

「ええい離れろ！それ以上くっついてたら腹搔っ捌いて内臓掻き乱してもう人間かどうか「ほいタッチ」え？」

ああ、そういうことか。どうせ碑霧さんは桂馬の近くにずっと居るだろうから仲良さそうなどこ見せ付けておびき出す作戦か。でも碑霧さん、言葉遣い直さない？

「あれか？あれは俺が考えたんだ」

「えっ！？なんでまた」

帰り道。僕は校門前で少し桂馬と話していた。それで舞ちゃんの作

戦の話しになって桂馬のこの発言。

「でもそれ桂馬には何のメリットもないじゃん」

「いや、碑霧が下校時刻まで生き残れたら一緒に帰る約束してたからな。逆に生き残れなかったな今日は別々ってことで。まあ上手くいってなによりだ」

「じゃあ桂馬が捕まったのって」

「おお、半ばワザとだ」

……鬼め。

ほのぼのな月曜日。 保健室の雑談（前書き）

パート？

碑霧千駕 ヒギリ センガ

身長 165cm

体重 52？

趣味 盗撮（桂馬を）

座右の銘 限界突破

将来の夢 軍人、お嫁さん（桂馬の）

ほのぼのな月曜日。 保健室の雑談

ぶー。ぶー。

携帯が鳴った。

あつぶねー！携帯電源切るの忘れてたのか！良かった先生には気づかれてないな、とりあえず確認。

メールだ、詩杏からだ。あいつ学校居たよな、メールなんかすんなよ。

『やつほー。今保健室いるから遊びに来てよ』

ふむ、あいつから誘うのは珍しいな。誘うぐらいならアポなしでいきなり遊びに行くってのがいつもの詩杏だろうに。珍しいからいつてやるか、暇だし。

いまは四時間目。あと10分で昼休み。

僕は昼休みになるのを待ち、保健室に向かう。

コンコン

「ほいほいーい。入ってー」

詩杏の声だ。自分の部屋じゃないだろ。

「失礼しまーす」

「いやいや、餡子ちゃんがあまりにも神々しいからって敬語なんか使わなくなっただけだよ。照れるじゃん。まあ、でも楽がどうしてもって言うなら考えてやってもいいけど」

「お前に言ったんじゃないよ、保健室の先生に、ってあれ？先生は？」

なぜか保健室には詩杏しかいなかった。

「知らない。職員室じゃん？」

「そっか」

僕はそれだけ言って詩杏が寝ているベッドの横の椅子に座る。詩杏も上半身を起こす。もともと興味があった話題でもないし。

「で？なんの用だ？」

「別に用は無いんだけど、暇だったから」

まあそんな所だろうとは思ってたけど。そういえば詩杏、制服見づかったんだ。女子の制服になってる。まあまだぶかぶかだけど。

「じゃあなんか話して。こっちは忙しい昼休みを詩杏のために使ってるんだから」

嘘だ。まったく忙しくない。

「うーん……」

悩んでいる。そりゃそうだ。何でもいいから話してください、程難しい振りは無い。

さあ、詩杏。一体どんな話を聞かせてくれるのかなあ？

「『僕らの楽しい遊び方』も今回で22話目だね！」

「最悪のチヨイスだな！！」

いきなりなんという話をしてくれる。びっくりしたわ。

「いやあ、今までいろんな事があつたよね！」

「そうだね！詩杏が登場したのは極最近だけだね！」

もうヤケだ。

「謎の連続殺人鬼と戦ったり、宇宙にいたり、一回の蹴りで3人もぶっ飛ばすような人と友達になっちゃったり、爆弾を体中に巻きつけて国会議事堂に飛び込んでいたりもしたよね」

「んなこと一個もないわ！！と、言いたいところだけど確かに一個だけある！中途半端に真実混ぜんじゃねえよ！！」

「え？爆弾のこと？」

「違う！もしそれを僕がしていたら今僕は死んでいるだろうが！！」

「そんな『僕らの楽しい遊び方』も今回で最終回です」

「マジで！？」

もちろんまだまだ続きます。

b y 踏鞴

「次回作は餡子ちゃんが主人公だよ！」

「僕の出番は！？」

「もちろんあるよ」

「おお！一体どんな！？」

「みんなに注目されて、なおかつ楽なんだよ」

「おお！それは一体！？」

「連続殺人鬼の第一被害者」

「それ、僕死んじやつてるじゃん！」

「というか探偵もの！？」

「いや、バトルものだよ」

「戦うの！？殺人鬼と！？詩杏が！？」

「どれ一つ想像できないよ。」

「いや、バトルは警察のみなさんにお任せで」

「結局他力本願じゃん！」

「もちろん推理も警察の人がやります」

「もうお前何するんだよ！本当に主人公！？」

「失礼な、推理をするのは警察だけどそれを披露するのは餡子ちゃんだよ。あと犯人の説得とか」

「良いとこ取りじゃねえか！！」

確かにバトルも推理も出来なさそうだけどね！これは酷い。

「というかそれはもうバトル小説じゃないな」

「じゃあ何小説？」

「うーん。披露小説？」

「……なんだか疲れそうだね」

疲労小説。確かに。

「じゃあお前はなにがいいと思うっ？」

僕は詩杏に聞く。

「ほのぼの系小説？」

「人が殺されてるんだぞ!？」

「仕事帰りにサクツと読めます。みたいな」

「なんか人気なさそうだな…」

「小説内では仕事帰りにサクツと殺されてます」

「僕が可哀想だ!」

話もひと段落したところで、僕はさつきから気になってることをきく。

「なあ、さつきから気になってるんだけどあの猫は？」

いつもあの猫は詩杏の頭に乗っていたはず。珍しいな。

「辰王 参門扉 狐火 だよ。ちゃんと名前覚えないと狐がかわいそうだよ」

「ただの猫なのにそんな大層な名前付けられる方がよっぽど可哀想だよ。というかお前も狐って略してんじゃん」

「いいんだよ、餡子ちゃんのは親愛の証だから」

「出会って一週間で親愛も何もないだろ」

「あるもん!愛に時間は関係ないよ!」

「確かに良い事言ってるけど、その愛は一方通行すぎるな」

「ア、アクセラ…」

「はいそれ以上はアウト!」

こいつと話していると一向に話が進まない。

「で？どうしたんだ？」

「知らない。今日探したけど見つかなかった」

なんだ。これだけ引つ張つといて知らないのか。

「ただ、ここ来る途中に遺書らしき物拾ったんだけど、狐大丈夫かなあ」

「ああ大丈夫だ。猫は遺書かけないしな。って、それはそれで問題あるじゃねえか！一体どこで拾った！？学校！？」

「ううん。富士の樹海」

「なんでお前学校来る間にそんなとこ行ってるんだよ！」

ちなみにここは富士山とは全くえんもゆかりも無い地域です。

「大丈夫だ…というかそれは僕たちには負えないから警察に届けようか」

「警察なんか信用できるかあ！」

「お前急になにがあつた！？」

「わしや、警察なんか信用したばっかりに……」

「だから何があつたんだよ！キャラ崩れてんじゃねえよ！あと、お前さっきの話の中で警察めちゃくちゃ頼ってたじゃん！」

「まあ茶番はここまでで」

うわ、いきなり元に戻りやがった。そして今までのこと茶番って言いやがった。

キーンコーン

「うわ、授業始まっちゃったよ。じゃあごめん詩杏、僕戻るわ」

「待ていー！」

「なんだよ」

「いいじゃん。もちっと話そうよ。餛子ちゃん暇なんだよ」

「じゃあずっと暇してる。こっちは平常点すら危ういからおいそれとサボるわけにやいかないの」

「ふっふっふ。もしかしたら餛子ちゃんとお話することで内申上がっちゃうかもよ」

ニヤニヤ詩杏。

「どついう意味？」

「餛子ちゃん言わずと知れた不登校児じゃない？」

自分で言うんだ。

「そんな不登校児が授業に出たらどうよ。そして餛子ちゃんはこの言うの『楽家くんが授業に出るって説得してくれたんです』」

「……じゃあまた明日」

「わー待って！」

「そんなんで内申上がるか。仮に上がるんだとしても授業に出たほうがよっぽど確実だよ」

「でもさ楽、次の時間授業何？」

「え？たしか英語だけど？」

「予習やった？」

「あ……」

そういえばこの昼休みにやるうと思ってた。というか写させてもらおうと思っていた。

「詩杏、今日何日？」

「25日だよ」

楽家遊喜、出席番号15。当たる可能性高い。

「よし、語り合おうじゃないか！」

「そう来なくっちゃ！」

わによーん。

「ん？何の音？」

「わっ！狐！おかえりー！どこ行ってたんだよー！」

ああ、猫の鳴き声だったんだ。

詩杏は猫に抱きつき頬擦りをする。猫が苦しそうだ。

「ふむふむ」

何かしている詩杏。

「隊長お！どうやら狐はでーとをしていた様であります！」

「うん、まずお前のテンションがわかんないよね。なんで僕隊長？
というかなんでお前猫の言いたいことわかるの？」

「なんとなくであります！」

「だろうなあ！」

「お、そうだ楽」

もう、さっきのノリは止めたらしい。飽きるの早いな。

「もう教室もどっていいよ」

「……はい？」

「いや、だからもう狐も戻ってきたし暇じゃないから楽は教室戻っ

ていつて」

どうやら僕はお払い箱らしい。

「ん？どうしたの？」

「ふざけんなー！ー！ー！」

久しぶりに本気の大声だしてスッキリした僕だった。

かんばる水曜日。 そろそろ本気で（前書き）

パート？

逆夢夜行 サカユメ ヤギヨウ（不徳、号傳鎖、黄泉子、富男、セラフィー、22番、さじ、物非、SNS、網美、福井翔、カリア、小舟、旋廻、たかな、啓）

身長 181cm

体重 67？

趣味 空き巣、いじめ、悪戯、スリ、詐欺、上司のツラを取ること
嫌いな人 自分も含め全員
嫌いな人種 大人、教師

肉団子先生（女） ニクダンゴセンセイ

身長 161cm

体重 92？

趣味 絵を描く、映画を見る

担当教科 美術

家族構成 母、妹、妹、弟、犬、犬、犬、犬、猫、猫、インコ

今回は二人書きました。と言うか肉団子の方は全然でて来ませんね。出させようと思ってるんですけどなかなか機会がないんですね。

と言うことで今回も肉団子が出てきません！

「成る程、大体のことは理解した」

「一応まだ僕なんにも言っていないんだけどね」

「しかし170番とは随分目標がひくいな」

僕らの学年は200人。

「ちなみに前はは何番だったんだ？」

うつつ、言い辛い質問をするなあ。

「ええと、にびやく……」

「ああ、最下位か。まあそつだろうか」

「…はち」

「208！？その八人は一体何処から出てきたんだ！？」

僕らの学年はぴったり200人の筈。

「さあ？……」

「はあ…まあいいや、でもそれだと本当にやばいじゃん」

「うん」

「わかった。教えてやる。じゃあまず何からが良い？」

何と言われても苦手教科しかないからなあ。でも強いて言つなら、

「英語で」

夜行が担当になったせいではほとんど分からなかったからな。

「わかった。じゃあこれやって。間違つたり出来なかつたりしたの

を説明するから」

そう言つて一枚のプリントを手渡す。つてこれ、授業でやったやつじゃん。なんで白紙なんだ？

「もしかして、授業寝てた？」

「んなわけないだろ、お前じゃないし。復習しようと思つてもう一枚貰つといたんだよ」

流石桂馬。

「じゃあ制限時間は二十分な」

「へーい」

僕はやり始める。でも一回授業でやったやつだ、僕でも出来るはず。あれ？これなんだろ？まあいいや、前後の文で想像しちゃえ。

二十分後。

「できたよー」

「ほーい、見せろー」

第一問

次の文の（ ）（ ）の中を埋めなさい。

(1) joe ate most of the cookise .
ジョーはクッキー（ ）（ ）を食べた。

正答 ジョーはクッキー（のほとんど）を食べた。

遊喜の答え ジョーはクッキー(らしきもの)を食べた。

「なんでだよ!!」

「うおっ!急にどうしたの?」

「一問目から全然違うわ!英文を読め!ジョーどんだけチャレンジヤーなんだよ!らしきものって!恐すぎるわ!」

なんかよく分からないけどいきなり桂馬が怒り出した。本当にどうかしたんだろうか。

(2) oh, dear, i'm short of money.

あら、いけない。お金()わ。

正答 あら、いけない。お金()が足りない()わ。

遊喜の答え あら、いけない。お金()じゃない()わ。

「偽札!?!」

(3) you can always depend on me.
いつでも私()いいよ。

正答 いつでも私()に頼って()いいよ。

遊喜の答え いつでも私()の方が()いいよ。

「お前どんだけ自信過剰なんだよ!いつでもってお前は一体なんなんだ!!」

(4) trains in this country don't leave on time .

この国では、列車は() 出発しない。

正答 この国では、列車は(時間どおりに) 出発しない。

遊喜の答え この国では、列車は(人の手では) 出発しない。

「じゃあ何で出発させるんだよ！列車自体が意識を持つてるのか！？」

(5) we have plenty of time .
私たちには() 時間がある。

(6) a small number of students could answer the question .
() 生徒がその問題に答えることができた。

(7) she saw hundreds of people around the stadium .

彼女は、競技場のまわりで() 人を見た。

正答 (5) 私たちには(十分な) 時間がある。

(6) (わずかな) 生徒がその問題に答えることができた。

(7) 彼女は、競技場のまわりで(何百人もの) 人を見た。

遊喜の答え (5) 私たちには(多くの) 時間がある。

(6) — (多くの) 生徒がその問題に答えることができた。

(7) 彼女は、競技場のまわりで (多くの) 人を見た。「量の問題はなんでも多くのをつければ良いつてもんじゃねえええ!! 全部間違いだ!!」

なぜか、さっきから桂馬が怒ってる。

「もつと簡単なところからやろうか」

あ、諦めた顔になった。

「じゃあ俺がいまから日本語を言うから、英文にしろ」

「わかった」

「『これは猫ですか? それとも猫かぶりの気持ち悪いぶりっ子ですか?』」

「どついう状況!?!」

「ああ、ごめん。これ、来年習う所だったな」

こんな文章ならうんだ。…ぶりっ子とか。

「『この泥棒猫が!』」

「昼ドラ!?!」

「『てやんでえい』」

「絶対ないよね! そんなの辞典で調べたって絶対のつてないよね!」

「んだよ、こんなのも分かんないのか」

「そんな事言われても……」

「じゃあ、次は日本史かな」

「英語は諦めるの!？」

「1192年に起こった出来事とは？」

ほんとに英語これで終わりなんだ。まだ何もやってないよ。

「憲法改正？」

「まだ憲法すら出来てねえよ!というかそんな出来事は存在しません!」

「へえ、知らなかった」

「いいか、語呂で覚える。いい国(1192)だったか?鎌倉幕府だ」

「疑問系!？」

覚えては無いが確か違ったような。

「納豆(710)臭いな平城京」

「うわ、普通に嫌だね、それ」

「泣くよ(794)ウグイス死ぬ前に」

「可哀想だ!あと、それだと何を覚えればいいか分からないぞ!」

「じゃあここで問題だ」

「来い!」

「織田信長が長篠の戦いで日本で始めて使った武器と言えば？」

「モビ〇スツ？」

「んなわけあるか!いつの時代だとおもってやがる!」

「ああ、ガン…」

「ガン〇ムつつたらぶっ飛ばすぞ」

あれ?何がいけなかったんだらう?あ、そう言っことか!

「起動戦士…」

「正式名称で言えつて言う意味じゃねえよ！全くおしくねえからそこら辺で攻めてくるな！」

「じゃあ何？答え言って」

「火縄銃だよ」

「え！？銃ってそんな昔からあるの！？」

「ガ○ダムの方があり得ねえだろうが！考えてみる！あの戦国時代にあんなでっかいロボットが戦場を闊歩していたらとてもシユールな光景になるだろうが！」

うーん。確かにそうかもな。

にしても今日は勉強したな。もういいや。

「じゃあもう疲れたからここら辺で良いや。桂馬、どうもあんがとね〜」

そう言つて出て行こうとする僕の腕を何かか掴んだ。まあ、桂馬だ。

「俺がこの程度で止めると思ってるのか？」

もちろん思つてないっすよー。桂馬、一回火がつくとなかなか消えてくれないからね。僕はもうとっくに冷めてるって言うのに。ああ、逃げたい。

そんな僕の思いとは裏腹に桂馬の手の力は一向に弱くならない。と
いうかむしろ強くなってる気がする。

「いやー。そういえば今日は用事が……」

「あ！？」

「なんでもないです……」

桂馬の目が怖いよー。

「そうか、じゃあと3時間は大丈夫だな」

僕が放されたのはそれから6時間後のことだった。

……少しは成績のびるかな？

焦る土曜日。 ってあれ？土曜日？（前書き）

ラスト。

松戸 マツド

1年5組担任。 趣味 競馬

赤宮 鮑 アカミヤ カンナ

2年生。 趣味 喧嘩

吉原&及川

3年生。 趣味 特になし

結愛 ムスビ アイ

3年生。 舞の姉。 趣味 空手

焦る土曜日。　ってあれ？土曜日？

おはようございます。

なんと今日は土曜日です。

さて、いつもの僕の休日ならのーんびり家で漫画を読んだりするんだけど、今日はそういう分けにもいかない。

皆は覚えてるかな？この間僕が夜行にアルバイト頼まれたこと。もしかして今日がそのアルバイトの日だったり。

最初は行きたくなかったけど、後から舞ちゃんと桂馬も来ることになったのさ。

まあでも後から桂馬が来れないということになって僕と舞ちゃんだけのデートと言つことになったのさ。

これで嬉しくないはずが無い！！

さあて、確か十時に駅で舞ちゃんと待ち合わせだったよな。

9：22

僕の家から駅まで20分とかからないけど、もう行くのか。なんてったって舞ちゃんが待ってるんだ。じつとなんてしてられない。

「いってきまーす」

嬉しい気持ちを抑えつつ、僕は居間にいる母に声をかける。

「いつてらっさい。ついでに牛乳買ってきてー」

いや、やだよ。なんでデートの帰りに牛乳買ってこないといけないんだよ。(デートじゃないけど)

「嫌だよ」

「じゃあコーヒー牛乳でもいいから」

「別に牛乳が嫌いだから嫌だって言ってるわけじゃない!」

「じゃあなんですよ」

デートの帰りに買ってくるのが嫌だからとはいえない。だってデートだって言ってるじゃないもの。(デートじゃないです)

「えーと、重いから?」

しまった。何も思いつかなくて変な言い訳になってしまった。

「……ごめん。いつてらっさい」

「ちょっと待とうか!自分で言っというてなんだけど、そこまで体力無いわけじゃないから!そこで納得しないでよ!」

「じゃあ頼んだよ。お釣りは自分のにしているから。いつてこーい」

「いや、お釣りも何も僕お金もらってないから」

「……」

「無視するなよ!自分の金で買えってか!?!というかまだ今月分のお小遣いも貰ってないんだけど!」

「今月分は私が使いました」

「何で!?!」

「お化粧品買うのにお金足りなかったから」

「それ自分の都合じゃん！僕のお小遣いが無くなる理由にならないよ！」

「ちっ！……じゃあ買っっていきたら小遣いやるよ」

「はあ、わかったよ」

ここで話してたら何分かかるか分からない。仕方ない、帰りにでも買っっていくか。

「いってきまーす」

「帰ってくんない」

その声はスルー。

「あれ？ゆづきじゃん」

僕がのっぺり歩いていると、不意にそんな声が聞こえた。

「あ、鮑さん。って、僕のことそんな風に呼んでましたっけ？」

その声の主は真っ赤な髪の赤宮鮑さんだった。あら、久しぶり。作者がプロフィール書いてて久しぶりにその存在思い出したからせつかくだから出してやろうと思ったのかな？

「あ、心の声が」

「心の中でそう呼んでますか！？別に悪口じゃないんだからそう呼んでもいいですよ！？」

「ちっ、つつかお前かよ」

ちだっけ？

「というか鮑さんはなにしてるんすか？」

「じゃあこちら辺で」

「無視ですか！？」

本当に嫌われてるんじゃないかしら。

「というかお前約束事あんじゃねえの？」

「あ」

現在9時、58分

「やばい！！」

ここから駅まで約10分ちよい。そして僕らの乗る電車の出発時刻は10時10分。ここは田舎だからそんな頻繁には電車は来ない。とうわけでやばい！せっかくのデートなのに！！(デートじゃありません)

「すみません！僕もう行きます」

「おう、じゃあなー」

手を振る鮑さん。僕も振り返しながら走り出す。

「はあ、はあ、はあ」

何とか着いた。時刻は10時3分。なんとあの距離を5分で来れた。愛の力だね！

「ちよつと遅いわよ遊喜」

「……………」

思わず私服姿の舞ちゃんに絶句してしまった。舞ちゃんの私服姿を見るのは久しぶりだった。もうかれこれ3年以上見てないのかなあ。

「ちよつと。なによ」

舞ちゃんが微妙に顔を赤らめている。そんな舞ちゃんが、もうとつてもかわいくて…

「好きだああああああ！！！」

思わず叫んでしまった。鼻血つきで。僕は純情か。いや、そうなんだけど。

そのまま倒れこむ僕。もうこれだけで幸せいっぱい死んでも良かった。けどそつは問屋が卸さない。

「何公衆の面前で恥ずかしいこといってくれとんじゃあああ！！」

後ろに倒れこむ僕に顔面パンチを食らわす舞ちゃん。おかげですごく
い勢いで後ろに倒れた。

「いつつたああああい!!」

高等部が！あ、間違えた。後頭部が！

「なにをするのさ!」

「それはこっちの台詞！あんたのせいで周りの人にジロジロ見られ
ちゃってるじゃない」

……半分ぐらいは舞ちゃんのせいのような気もするけどなあ。

「まあまあ落ち着いてよ二人とも。せつかくこれから楽しみが始ま
るのに喧嘩してたらつまんないよ」

第三者の声が出た。というか詩杏だった。

「詩杏!？なんでここに!？」

「ああ、私が呼んだのよ。あんたと二人なんて嫌だし」
「……………」

僕のウキウキを返せ!!

「まあ良いじゃんさっさといいー。おー」

そう言う詩杏のこえが遠くに聞こえた。

焦る土曜日。 もうやだ！

僕らは3人は何とかぎりぎりの時間の電車に乗ることが出来、今バスでその夜行の妹さんがいるという大学へ向かっている。

「狐もいるから4人だよ」

うん。 そう言う詩杏の声は無視。 というか持つてくんな。

バスが止まる。 どうやら大学前に着いたようだ。

「お待ちしていました。 君が遊喜くんですか？ なかなか立派な青年じゃないですか」

「いや、僕はこっちです」

大学の前には白衣を着た女性が立っていた。 多分夜行の妹かな？ 僕たちが来る時間帯を見計らって迎えに来たようだ。 全然見当違いの大学生に声をかけていた。 背格好で気づけ。 全然高校生に見えないだろ。

「おお、それはすみません。 で、君たちは？」

女性が舞ちゃんたちを見ながら言う。

「あ、私たちは遊喜くんの付き添いです」

「ふうん。 そうですか、では早速ですが我が研究室に来てもらいます」

今思ったんだけど、この人30は年行つてそうだよな。 夜行が28

って言ってたから、（まあ夜行の自己紹介を信じるならだけど）妹
ってのはおかしくない？

そう思っつて、歩き始めていた彼女に聞く。

「あのう、失礼ですが、今おいくつで？」

「31ですがそれがどうかしましたか？」

あの野郎おおお！やっぱり妹っつてのは嘘だったか！マジでここで
嘘つく理由がわかんねえ！何がしたいんだあいつは！

「じゃあ、夜行とはどういったご関係で？」

「ヤギヨウ？誰です？おっと着きました」

どうやら研究室に着いたらしく、扉を開けた。しかし僕は聞き逃さ
ない。

「知らないんですか！？逆夢夜行ですよ！あなたが夜行にこのアル
バイト人員誰か紹介してくれっつて頼んだんじゃないんですか？」

「知らないですっつてば。私は鶴君に聞いただけです」

「鶴くん？」

「ああ、私が高校生と大学生の時の後輩です」

「ちなみにフルネームは？」

「物非ものひぬえ鶴です」

物非…確かあいつの偽名レパトリーの中に入ってたな。学生時代
から偽名だったのかそれが本名なのかは知らないがやっぱり迷惑な
やつだ。あいつの言うこと何一つ信用でき無いよ。

「鶴くんはやつぱりまだ浴衣を着ているのですか？」

はい、鶴くん〓夜行決定。

「あ、はい」

僕は適当に答える。

「そうか、私は最近電話でしか鶴くんと話していないからね。懐かしいですね。って、その機械に触ってはいけません！君は右手首が箱ティツシュになってもいいのですか！」

一人、研究室内で暴れだした詩杏に注意する。

箱ティツシュって一体どんな機械作ってるんだよ。恐いにも程があるわ。

「でも便利でしょ？」

「それ以上に不便ですけど」

きつと便利と思う機会のほうが少ないはずだ。突然鼻血が出たときとか、万年花粉症の人とかには重宝されるかもしれないが。いや、されないか。

「ちなみにポケットティツシュヴァージョンがこちら！」

「いらんわ！」

「しかし売り上げ的に言えばこっちの方が人気なのですがね」

「え！？何！？これ、実用化されてるの！？そして買った人がいるの！？」

無駄なところに労力を使うな。確実に金が無駄になっている。僕に少しくれないかなあ。

「そうか、じゃあそろそろ実験を始めるか。遊喜くん、隣の部屋にあるヘルメットのようない青い機械を持ってきてくれないか？」
「あ、はい」

おっと、うつかりしてた。僕はアルバイトに来てるんだった。

僕は言われたとおり隣の部屋へ行き、そのヘルメットを見つける。よいしょと持ち上げ……重っ！なんだこれ！？外見からは想像もできないような重さを誇っているぞ！

「舞っちゃーん。助けてー。舞っちゃーん、舞っちゃーん、舞っちゃーん、
ちゃーん、ちゃーん、ちゃーん」

「ええいもう、うるさいわ！何回ちゃーんだけ連呼すんだよ！」

「あと2回？」

「意外ともうすぐだった！」

少しご立腹のようだが来てくれた。

「マイエモン。このヘルメットが重いんだよー。どうにかしてくれよー」

「誰がマイエモンだ」

悪態をつきながらも運んでくれた舞ちゃんに感謝する。途中、「うわ、重っ！これを女子に運ばせるってどうよ」とか言ってた気がするけど気にしない。僕の方が力ないもん！

「じゃあこれから実験を始めようと思います。遊喜くん、これを頭に装着してくれませんか？」

「ああ、電源を入れればもう重さは感じなくなるから大丈夫ですよ」
「じゃあ早く電源入れてください!!」

そろそろ本気で僕の首がピンチだ。

「あはは、まあそう焦らないで」

焦るわ！お前一度でいいからこのヘルメットかぶりやがれ！僕の気持ちは分かるから！絶対あははとか言つてられない状況になるから！

「はい、電源点けますよー。さあーん、にーい、いーち」

カウントダウンはいいから！カウントダウンはいいから予告もなしにいきなり点ける！お前絶対ワザとやってるだろ！お前もあとで覚えてるよ!!（泣）

「ぜろお!!」

「……………」

おお、ホントにヘルメットが軽くなったみたいだ。…あれ？おかしいなあ。体が全く動かないぞ。眼球はなんとか動くみたいだけどそれ以外はさっぱりだ。声も出ない、どうしよう。

「成功みたいですな」

え？これ成功？もしかして僕の体の動きを止めるのが目的？つとうわああああ。

と、言いたかったが、言えなかったので心の中で言った。なぜ驚いたのかというと、僕の右手が自分の意思とは関係なく動いたから。

そりゃびつくりするわ。

「君の体の支配権は私に移った」

「ん？ねえどーゆーこと？狼ちゃん」

自信満々言った発言に対しての詩杏のこの質問。ってそういえばこの人の名前まだ知らないな。いつの間に詩杏は聞いたんだろ？ということは僕は名前も知らない方の言うことを聞いて怪しげなヘルメットをかぶったというわけか。それはいかんなあ。

「だからね、普通は遊喜くんの体って遊喜くんにしか動かせないでしょ？それを他人が動かせるってわけ。早い話がラジコンみたいな物ですね」

「おお。すごい」

なるほど、リハビリとか介護とかの時とかに役に立ちそうだな。

「これを敵国の捕虜の兵士に取り付けたらもう誰も攻撃できないでしょう」

恐ろしいことを考えていた。軍事目的かよ。というか敵国とか日本にいないよ。

「じゃあそろそろ声帯の支配権は返してあげましょう。感想ぐらい聞きたいですし」

そう言っただけ何かりモコンのような物进行操作し始める。ああ、やっぱり名前知らないと居心地悪いな。

「もう喋れるでしょ？」

「あなたの名前はなんですか!？」

「もつと他に聞くことがあるでしょう!？」

なぜか悲しそうな顔をしている。

「あ、そうだ!外して下さい!居心地が悪くてしゃーないです」

「まだ実験中なので無理です」

そりゃそうだ。

すると、僕が勝手に立ち上がった。そして前のテーブルへ。

「お腹が空いていたでしょう?そろそろお昼です。昼食にしましょう。もちろん遊喜くんはそのままです」

いやだー!

やっぱり散々だった。

食べ物や飲み物は落とすし、飲み物はこぼすし、拳銃に何も無いところで転びやがった。絶対ワザとだろ。おかげで服が汚れちゃった。どうしてくれる。クリーニング代払えよ。

と、言いたかったが食事の時にまた喋れなくなったし、完全に相手

に体を支配されてる状況でそんな文句なんか言ったら僕の体がどうなるか分かったもんじゃない。

「あーあ、あんた服がべちょべちょじゃない」

そう言うのは舞ちゃん。でも僕の所為ではないんです。100%。

「そっといえば服がありますよ」

思いついたように研究室のロッカーを開ける。その中からおもむろに取り出したのは何着かの服。

何かの作業着、浴衣、メイド服

浴衣は夜行のものかなあ？って一つ変なの混じってるよ！？まさか生で見られるとは思って無かったよメイド服！何でこんなもんあるんだよ！！

「どれがいいですか？」

断固作業着で！！言おうとしたが口が開かない。てめえ、質問してるんなら会話くらいさせろや！

「なにも言わないようでしたらこちらで勝手に決めさせていただきますが？」

おいしいおいしい！！それなら喋らせる！！リモコンを動かせ！！それともやっぱりワザとか！？というかもう、そうだろ！！

「うひひひひひひひ、楽には何が似合うかなあ？」

詩杏まで意地悪そうにニヤニヤ笑ってる。というかもうメイド服を

手に取っている。こんな時は助けて！舞ちゃん！！
僕は使える目を使って必死に舞いちゃんに訴えかける。

「まあ、似合うんじゃない？」

酷おおおおおおい！！！！というか僕、それ着る事決定！？

「じゃあまず服を脱がせますねー」

まてやああああ！！ああ！手が勝手に！！

「うひひひひひひ」

「あ、携帯あるけど写真取る？」

「なんならポーズとらせることも可能ですが？」

もう帰らせてください！！！！

それからのことはもう一生思い出さたくない……………。

和む木曜日。 お昼にて

「舞ちゃーん、一緒にご飯食べよー」

四時間目も終わり、いよいよお昼休憩。僕は3つ前の舞ちゃんの席にガタガタと椅子を持っていく。他の人の椅子借りてもいいんだけどね、なかなか僕に貸してくれないのさ。なんでだろ？

「は？嫌よ」

……断られるとは思ってなかった。

「そもそもあんたいつつも桂馬たちと食べてるじゃない。桂馬はどうしたの？」

「あ、うん。一応いるけどね」

僕は桂馬の方に目を向ける。

「桂馬くんっ！一緒に食べよ！」「は？嫌だよ。そもそもお前いつも一緒に食ってるメンバーはどうした？」「みんな休みなの！」「お前：妙な手使ってないだろうな」「一緒に食べよ！」「ああ、悪いけど俺、遊喜と食べるから。ってあれ？遊喜は？」「舞ちゃんのところに行っちゃったみたいだね！」「なんでだよ！！」

ごめん桂馬。碑霧さんに頼まれた（脅迫された）から。

「っていつわけ」

「なるほど」

他に言い訳がなくなってしまった桂馬。仕方なく一緒に食べることになったようだ。(というか一回こっちに来ようとしたけど、碑霧さんに首をつかまれて止められてしまった)別にいいと思うけどな。碑霧さん綺麗だし。…性格はアレだけど。

え？脅迫された僕？もちろん満足さ。だってそれで舞いちゃんと一緒にご飯食べれるんだもの。いやあ舞ちゃんは本当にいつ見ても可愛いなあ。

「変なこと思うな。気持ち悪いわ」

「いて」

舞ちゃんに軽く小突かれた。どうして僕の考えてることが分かったんだろう？あ、顔がニヤニヤしてたからか。気を付けないと。

「あれ？舞ちゃん購買行ってきたの？」

見ると、舞ちゃんの机の上には沢山のパンが乗っていた。アンパン、メロンパン、カレーパン、チョココロネ、クリームパン、その他諸々。って食べすぎでしょ。僕でもこんなに食べれないよ。いや、僕は男子の中じゃ少食な方なだけれどさ。

「違うわよ。お母さんが弁当作るの忘れたから、ここ来る前にコンビニ寄ってたの。購買は混むから嫌なのよね」

「でもなぜにパンオンリー？」

「好きだから」

あ、そっすか。案外普通な答え。まあ舞ちゃんの好みが分かったからよしとしよう。

「少なくとも遊喜よりは」

「酷い！」

僕パンにも負けてんの！？いや、確かにそこまで好かれては無いとは思ってたけどさあ、120円や150円にも負けるとはショックを隠しきれませんよ…。

「ああ、大丈夫。おにぎりには勝ってるわ」
「嬉しくないやい！」

舞ちゃんの中ではパン>遊喜>おにぎり、か。なんか複雑な気分。というか、おむすびうまいのくせにおにぎり嫌いなのかよ。文化祭のとき食べてたくせに。あ、別に嫌いではないのか。僕と比べると嫌いなだけで。そう思うとなんだか嬉しくなつて…来ないわ！

おっと、僕が考えてる間に舞ちゃんは早くも3つ目のパンに突入してるぞ。メロンパンか、少し分けて貰おうかな。

「ねえ、舞ちゃん」

「嫌よ」

「速っ！僕まだ名前呼んだだけじゃん！」

「だいたい予想つくわ。これ少し頂戴とかって言うんでしょ？」

あ、わかっててくれないんだ。

「そんなこと聞こうとしたんじゃないやい！」

「じゃあ何？」

しまった。反発して変なことを言ってしまった。どうしよう。

「え〜と、ど、どうしてメロンパンってメロンパンって名前なんだろうね〜?」

苦し紛れ。

「……………」

「無言は止めて!謝るから!ごめんなさい!」

まさか本当に謝るとは。自分で自分にびっくりだ。

「…模様がメロンに似てるからじゃない?」

おお、反応してくれた。というかもしかしてさっきのはシンキングタイム?だったらなかなか早く答えにたどり着いたな。当たってるかどうか知らんけど。

「それに緑色だし」

「そういえばあんまり緑色の食べ物ってないよねー。野菜の他には」

「緑色のご飯とか絶対まずそうだもんね」

「ああ確かに。芋虫食ってるみたいだしねー」

ゴス

殴られた。今メロンパン食べてる人にする話じゃないよね。反省。

「でも色だったらさー、青とかの方がキモくない?」

僕はめげずに色の話を続けます。

「青いのは…無いわね。かろうじてナスが紫ぐらいね」

「でしょー？今僕思ったんだけどさー、自分が食べたいものとかつてよく兄弟とかに食べられちゃうじゃん？」

僕は兄弟いないから知らないけど。

「そういつときは青い着色料でもぶっかけてやればいいんだよ。気持ち悪くてだれも食べない」

「それ、自分も気持ち悪くて食べれないじゃない」

本当だ。この完璧な作戦の盲点を見つけるとは、舞ちゃんなかなかやるな。

「あ、私もう食べ終わっちゃったから行くね」

「速っ！あの量もう食べ終わったの！？」

僕の返事を聞かず、舞ちゃんは行ってしまった。え？追いかければいいじゃんだって？僕まだ弁当開けても無いよ。ははっ、結局一人だ。

「おい！あんまりこつち来るな！」「いいじゃん、あたしと桂馬くんの関係なんだからっ！」「どんな関係だ！」

少し離れたところで聞こえる声に、イラッとした16歳の秋でした。

和む木曜日。 お昼にて（後書き）

遊言の舞ちゃんラブ度が尋常じゃなく上がってきてます。最初はここまでじゃなかったはずなんですけど。あ、碑霧千駕さんもすごいです。

軽快な火曜日。 隣の

やばい！

そう感じた時にはもう遅かった。全てが手遅れだった。この先どうすればいいのかも分からないし、今までどうやってきたかすらも忘れたしまったかの様に頭の中が真っ白になった。

手遅れだ。

そう感じるのすら、遅すぎた。

……教科書が、無い。

やばいなー。あの先生は不特定多数の生徒に当てることでも有名なのに。しかもこの先生ときはもうすでに4回ほど忘れ物他多数で叱られてるのに。流石にもう失敗は出来ないなーと思ってたらその矢先にこれだよ。仕方ない。恥を忍んで周りの人に借りるか。

まあ周りの人といっても前や後ろの席は見せてもらい無いから却下で。(そもそも僕の席が一番後ろだから後ろの人はいないんだけど) じゃあ左隣。

ヘルタクン。(もちろんあだ名。本名なんだっけ?) はばっちり寝てるね。せんーせーこの人寝てるんですけど。起こさなくていいんですかー?

わー、先生ガン無視だ。僕が寝てたら机蹴り飛ばしてでも起こすのに(過去に2回経験有り)。

仕方ない、僕が起こしてあげよう。教科書見せてもらいたいし。

「ヘルタクーん」

「ぐー」

「おい、もう授業始まつてるよー」

「がー」

「ちよつとー」

「ごー」

「……………」

駄目だ。まったく起きる気配無し。教室でこれだけ寝られるのは逆にすごいけど。

じゃあ、右隣。……碑霧さん。うわー、気が進まねー。

いや、でもしかし碑霧さんだって委員長なんだ。きつと心優しいはず！快く見せてくれるさ！多分！

「あの〜ひげ…」

「嫌だ」

早っ！まだ僕碑霧さんの名前もちゃんといつてないよ！

「そんなこと言わずにさー。お願いしますよー」

めちゃくちゃ低姿勢な僕。将来の姿が目に見える。

「話しかけんな。馬鹿がうつる」

「うつるか！」

小声での叫び。これって普通に叫ぶより疲れるんだよなあ。

「じゃあ運動音痴略してウンチがうつる」

「それもうつらない！というか女の子がそういう言葉を口にするんじゃないありません！」

「っせえよ。お前あれか？女の子に妙な幻想抱いてるクチか？だったらそんなもん捨てちまえ！」

「一体何処でキレたんだよ……」

「女子だってなあ、基本は男と同じじゃ！アレが付いてるか付いてないかの違いだけだ！」

「わかった。じゃあ桂馬にもそう言っとく」

「ごめん。なんだっけ？教科書？うん、見せるよ。当たり前じゃないか」

「……」

「……ここまで手のひら返せる人って逆にすごいな。なかなか居ない。あそここまで弱みが分かりやすい人も。」

「っーかお前なんでまた教科書なんて忘れたんだ？あたしは全部置き勉強してつから、忘れることなんてないぞ」

「それもどうかと思うけどね。僕は一応予習してきたんだよ。だからその時に。まあノートも一緒に置いてきちやったけど、それは他ので代替可能だからね」

「なんと」

碑霧さんが驚いた様子を見せている。僕が予習やったことがそんなに珍しいのか。まあ確かに予習なんてやったの3ヶ月ぶりぐらいだけだ。

「お前……ノートなんて学習道具持ってたのか」

「そっから!？」

「『オレは毎日弁当と国語辞典しか持ってきてないぜ！キャッホー」

「イ！」ってお前が言ってたような…」

「誰だよそれ！？全くもって僕のキャラじゃないじゃん！そして勉強道具は持ってこないのに国語辞典は持つてくるのな！何故！？」

枕にでもするのだろうか？だったらそれこそ学校に置いていけ。毎日疲れるだろ。

「まあなんにせよ、お前が予習してんのも驚きを隠せないぜ！」

「テンションどうかした！？さっきの碑霧さんが真似した僕みたいになつてるよ！？」

まあ僕じゃないけど。

「でも、この間この先生の授業でこっぴどく叱られたからね。ちょっと真面目にやろうと思ったんだよ」

「この間というのはラリアット事件か？」

「違う違う。それは科学の民空先生でしょ？」

「じゃあ廊下で逆立ち3時間？」

「それは倫理の中曽根先生」

「ああ、沸騰したお湯ぶっかけられたやつか」

「それはもう家庭科室だったじゃん。奇等妥先生だよ」

「チエーンソー」

「古見時教頭だね」

………どれかひとつぐらいは「そんなことは流石に無かったよ！」っていう突っ込みをしたい。自分のことだがこんなにも叱られていたとは。…というかもうこれ、体罰で訴えられんじゃねえの？

「ああ、思い出した。お前にしては何の面白みも無く普通に叱られてたやつか」

「僕はこのクラスでどういうポジションに配置されちゃってんの？」

「娛樂？」

「酷っ！」

まあ確かに身から出たさびとは言え……。よし、これからは真面目に生きていくと誓おう。

「じゃあここ樂家君。答えて」

「ほえ？」

しまった！全く先生の話を聞いていなかった！せつかく碑霧さんから教科書見せてもらってるのに！

あ！というか何みんなニヤニヤしてんだコラ！くそっ！こつなりや意地でも答えてやる！

……わかんねえ……。

ちよんちよん。

ん？なんだろう？碑霧さんがシャーペンで突いてくる。

で、シャーペンでノートに何か書いてる。って、もしかして碑霧さん！答えを教えてくださいさっさといるのですか！？とてつもなくありがたい！碑霧さん、僕は君の事好きになりそうだ！

「どうしたのですか？わからないのですか？」

ちょっと待って先生！もう少しで碑霧さん書き終わるから！

えーと、何々？『熱湯もう一度希望』

って、リクエストかいいいい！！

しらねーよ！そこら辺の体罰は先生がやるかやらないか決めんだよ！
！というかもし僕に決定権があるんだとしたら僕は絶対やらないよ
！あれ、めちやくちや熱いんだぞ！5分ぐらい熱いのが続くんだぞ
！知ってんのかお前は！

『チエーンソーでも可』

僕死ぬわ！！

「楽家君？」

結局、教科書忘れたこともばれたので先生のお叱りを受ける羽目に。

改革の火曜日。 あれ？そういえば

放課後。

僕らはいつものように第二美術室に居た。

「まあ、いつものようにって言ってもここで物語り展開するのは久しぶりなんだけどね」

「おいコラ、いきなりそんな発言すんな」

「そうよ遊喜。そもそも物語展開なんてこの小説にはあってないよ
うなものじゃない」

「お前もだよ、馬鹿舞」

「ば、馬鹿つて。失礼ね、遊喜よりは随分マシよ」

「残念だったな。それは生物なら誰もが持っている基本スキルだ」

「ちよつと！人間とかならまだしも生物つて！僕はオケラやトンボ
や詩杏よりも頭が悪いつて言うの！？」

「お前の中では詩杏はオケラやトンボと同じ扱いなんだな」

「そもそも詩杏、結構頭良いわよ？」

「え？そうなの？」

「詩杏ならオケラは螻蛄、トンボは蜻蛉と言うでしょうね」

「負けたー！」

そんなの僕でなくとも書けないだろ！多分！

「でも、僕、詩杏にテストで負けとことないよ」

「そりゃ、あいつテストなんか受けたことないからな」

「あ、そういえば」

「そういえば遊喜、今回のテストはどうだったんだ？曲がりなりに
も俺が教えてやっただろ」

「ああ、うん。前回よりかは良かったよ」

「へえ、で、具体的には？」

「数学Aが4点、世界史が8点、倫理が6点、英語が32点」

「お前大丈夫か！？」

「というか何故に英語だけ微妙に高いのかしら？赤点だけど」

「え？僕的には頑張ったと思うけど」

「まあ、何とかなるんじゃない？平常点もあることだし」

「残念なからそうはいかねえな」

舞ちゃんのフォローに桂馬が口を挟む。なんだこいつ4話ぶりのちやんとした登場の癖に。

「遊喜、授業は？」

「昼寝の時間」

「テストは？」

「壊滅寸前」

「提出物は？」

「なにそれ？おいしいの？」

「…ごめん、桂馬。私が間違ってた」

あれ？急に舞ちゃんの元気がなくなったな。どうかしたんだろうか？

「ちなみに桂馬はどうだったのさ」

まあ、桂馬は毎回学年トップ5に入るほどの頭の持ち主だからなあ、僕の3倍ぐらい行ってるんだろうな。

「俺か？数学Aが97点、世界史が95点、倫理が100点、英語が109点だ」

「亜wセdrftgY不二子1p」

「桂馬ー。遊喜が理解の範疇を超えて壊れたわ」

「まあ元から壊れてるようなもんだから大丈夫だろ」

酷い言い草だ。

「にしてもあんた、何で限界突破してんのよ。なに？英語109点
つて、その9点はどっから出てきたのよ」

「まあ、気合みたいなもんだ」

「そんなんで分かるわけないでしょ。もっと具体的に言いなさい」
「具体的にいうと裏金だ」

「聞きたくなかった！というか全然気合関係ないじゃない！」

「まあ冗談だよ。ただの採点ミスだと思っぞ」

「ふうん。祭典椅子ねえ」

「違う違う。なんだその楽しそうな椅子は」

「ぷはあ！」

「お、遊喜復活したか」

「そのまま死ねばよかったのに」

「舞ちゃん酷いよ！僕何かした！？」

唐突の毒舌はこたえる。

「そついえば舞ちゃんはどつだったのさ」

「え？私？」

「ああ、そついえば舞だけ聞いてないな」

「えーつと、数学Aが34点で、世界史が45点、倫理が42点、
英語が93点ね」

「すごっ」

「酷いな」

どうやら僕と桂馬では考え方が違うみたいだ。

「にしてもなんで英語だけこんなにみんな点数良いんだよ。なんだよ舞の93点って」

「いや、109点の奴に言われたくないけど」

「そういえばさ、僕、とんでもないことに気づいたんだけど」

「ん？なに？」

「英語の教師ってやぎ…山田先生じゃん」

「あ、そういえば」

「というかお前いま先生のことをやぎって言いそうになったか？」

もう、そこに突っ込まないで欲しい、夜行って言いそうになっただけだ
けだ。

「でもあの先生お世辞にも授業が上手いとは言えないよね」

「というより下手くそね」

「確かに、不思議だなあ」

ドッドピーチャンツ

あ、久しぶりの変なドアの開閉音。もう僕が言わないと何の音だか
分からないじゃないか。

「やあ、わたしのことをボロクソに言ってるどころ失礼するよ」

「あ…」

「先生…」

「何しにきたんすか」

出てきたのは山田もとい夜行だった。

「いやあ、本日からはれてこの部活の顧問をやらせていただくこと

になったわけだから挨拶をしようと思ったんだけどねえ」

「部活？」

「部活？」

「迂闊？」

おい、最後の人微妙に違うぞって、僕か。

「そう、部活。部員が5人以上になったら強制的に同好会から迂闊に昇格だからね」

迂闊じゃなくて部活な。そればとなんか降格してるみたい。

「でも、俺らと詩杏と後誰です？」

気になった桂馬が聞く。確かに今のままだと4人しかいない筈。

まさかあの黒猫とは言わないよな。

「ああ、ええつとだれだっけ？君らのクラスの委員長。の……」

「碑霧の奴か……」

桂馬が困ったように頭を押さえる。まあ、なにが目的で入ったか分かるもんね。

「そう、碑霧さん。彼女が入って部活に昇格だよ」

「あ、それ言うために来たんですか？」

「そうだよ。君らがあんまり長く話してるから登場がこんなに遅くなっちゃったけど。本当なら15分前についてただけどねえ。でもまさか君らがわたしの悪口を言ってくれて助かったよ。わたしも登場しやすかったし」

「……」

……
ああ、それはすみません。

晴れやかな金曜日。 全員集合

いつもの放課後。

いつもの第二美術室。

ただ、そこにいる者の雰囲気だけは違った。

机を四つ並べている。そこに桂馬以外のメンバーが座っている。

その机の前に一人立った桂馬が重く口を開く。

「さて、今日ここに集まってもらったわけだが」

「えー！？それは無いよ舞！」

「はあ？じゃあ詩杏はいつもなんなのよ？」

「無機シアン化合物だよ！餡子ちゃんの名前も入ってるし」

「ええー！？それこそあり得ないんじゃないの？」

うん。どうやらあの二人は別の世界に行っちゃってるようだ。

どうやら真面目なのは僕と桂馬と碑霧さんぐらい

「桂馬くんっ！明日暇でしょ！？たまたま映画のチケットが2枚手に入ったんだけど一緒に行くよ！」

「決定事項！？俺の予定を聞くのが先だろ！」

「え？暇じゃないの？」

「明日は用事がある」

「……………女？」

「まあ、広義に解釈すれば女…ってやめる！違う！そう言う意味じゃないからその振り上げた椅子を下ろせ！」

「じゃあどついつことなの？一からちゃんと説明してもらおうじゃないの」

「……なんで付き合ってるわけでもねえのに」

「なんか言った？」

「なんでもないです！なんでもないからその振り上げた机を下ろしてください！」

前言撤回。やっぱり真面目なのは僕だけだった。

というか明日の桂馬の予定が気になる。

「ねー桂馬。何のためにこんな皆で大集合してんの？私もう疲れちゃったんだけど」

詩杏との会話に飽きたらしく、舞ちゃんが声を上げる。いや、あんたらが話してるから一向に話が進まなかったんだけどね。

「おお、悪いな。今日集ってもらったのは言うまでも無い。この同好会が部活に昇進したことだ」

「ええー！そうだったの！？」

驚く詩杏。めっちゃくちゃ言うまでもあったな。これ、文法的に正しいかどうか分かんないけど。

「まあ部活になるといろいろ同好会時代とは変わって決め事とかが増えてくるから今ここで決めようって魂胆だ」

「決めるって何を？献立？」

「お前の頭には食べることしかねーのか、詩杏」

早速詩杏が突っ込まれる。

でも決め事ってなんだろ？同好会と部活で変わることか。：やる気とか気合度かな？まあ僕の偏見かもしてないけど。だとすると必然的に決めるとなるのは、

「掛け声？」

「お前の頭は何で出来てんだ。死ね。そして生まれ変わってもつかい死ね」

「突っ込みが酷すぎる！」

一応僕の今日初発言だったんだけど。

「あれだよ、部長とか活動内容とか部活名とかだよ」

「何で今更そんなこと」

「そうよね、部長は桂馬で、活動内容と部活名は前と同じで良いと思うけど」

僕の発言に舞ちゃんも賛同。

やったぜ！

「俺が部長はやダ。そして前の名前と活動内容は今年の文化祭みたいなのがまたあったら困るから変えることにした」

「さすが桂馬君っ！」

「えー、じゃあ部長誰にすんの？こいつっちゃあんだけど桂馬以外でそんなのやりたがる奴なんていないよ」

「俺も嫌だわ、アホ。大丈夫、考えはある」

「何？」

「いやあ、本当に部長やるのは嫌だなあ。どこかに変わってくれる優しい人は居ないかなあ。いたら本当に感謝するんだけど。まあでも居ないよな、仕方ない、優しい人はどうやらこの部活にはいない様だから俺がまたやるしかないか。ああ、本当に面倒だなあ」

ああ、もう分かった。全部分かった。

「あたしがやるわ!」

勢い良く挙手するのは言わずもがな、碑霧さん。にしても碑霧さんやっただじゃん。一年生にして早くも部長だ。

「よし、部長は決まったな。じゃあ千駕、ここからは頼む」
「はいっ!」

碑霧さんが語尾にハートマークでも付きそうな勢いで返事をする。きつと「頼む」が嬉しかったんだろうな。

「じゃああたしが新部長の権限としてこの部活の活動及び部活名を決めるぞ」

「わーい」

「いやっほーい」

「ほっほほーい」

「ふぁいとー」

みんな適当だなあ。僕もだけど。

今気づいたけど部員が集まってから部活決めるのっておかしくない? 普通順序が逆でしょ。

「じゃあ今からアンケートとるから。…じゃあまず桂馬くんから」

「パス」

「決定ね」

「おかしい!今のやり取りは絶対におかしい!桂馬いいの!?!僕ら

の部活パス部になっちゃうよ!？」

「パス部……なかなか言い響きじゃないか」

「それ活動何するんだよ!」

「そりゃあもうパスでしょうね」

「うんうん、パス以外の何物でもないよねー」

舞ちゃんと詩杏も賛同する。あれ？反対してるの僕だけ？

「いやいや、それ何するかわかんないってば!」

「じゃあ楽はなにが良いの」

「え？えーと、うーん……き、帰宅部？」

「お前一人で帰ってるや!そしてそのまま帰ってくんない!」

「さっきから突っ込みが酷い!」

僕だって別に本気で言ったわけじゃないのに。思いつかなくて、ついで。

「仕方がないな。あたしが勝手に決めるぞ。これで良いな?」

そう言いながら、碑霧さんが美術室の黒板に文字を書いていく。まあパス部以外だったら何でも良いか。

『楽家遊言部』

「うん、まあ良いな」

「まあ文字を見た瞬間嫌な気分になるけれど及第点ね」

「餡子ちゃんは賛成だよー」

「だーかーらー!なんで僕の名前が部活名になっちゃうのさ!?!?おかしいでしょ!?!これは本格的に何するの!?!?というかいじめだ!」

すると碑霧さんがため息をつき、「やれやれ、こいつ何もわかってないなあ」といった表情を見せる。そんな表情したいのはこっちだよ。

「これは別にあなたの名前じゃねえぞ。『楽しい家で遊ぶで喜ばう部』の略だ」

「明らかにこじつけじゃねえか！『楽しい家で』って基本的に活動場所学校だよ！」

「あなたの家で活動してもいいのぞ？」

「断固断る！」

「そうだな、狭いもんな」

「うるせい！そういう意味じゃないやい！」

狭いのは否定できないが。

碑霧さんと会話すると傷つく。というかそろそろ真面目に決めて欲しい。

「しかたない。そろそろ真面目に決めてるぞ碑霧」

「うん！わかったわ！」

最初っからそうしろ。

「まず基本的なことだけど運動系は駄目だぞ。面倒だから」

まあそりゃそうだろうな。そもそも運動したい奴はこんなところにいるいだろっし。

「えー、サッカーとか野球とかやりたーい」

よし。詩杏は籍だけ置いてどっか行け。

「で、あたしたち、って言ってもあたしはまだ日数浅いんだけど。まあ、あたしたちの通常の活動と言えればやっぱり遊びになっちゃう訳だよな」

「まあそうだねえ」

「そこが一番の問題よね。まさか活動内容に将棋やトランプをして遊んでますって書くわけにもいかないし」

「あ、俺良い事思いついた」

突然桂馬が言う。桂馬の言うことだから信用は出来るかもしれない。

「ああ。なるほどねえ」

「さすが桂馬くんっ！」

「じゃあそれで良いわね」

「zzzz…」

一人寝てる奴がいたがそれ以外は満場一致だ。さあ申請書を出しにいっつ。

「……で、何これ？」

「部活動の申請書ですけど？」

僕はたまたま近くの廊下に居た夜行を捕まえて申請書を出した。

「ああ、まあ良いけどよお、なにこの『ゲーム理論研究部』って？」

「その名の通りですよ。いろんなゲームを経験して、どうすれば勝ち上がれるのかを考える部活です」

「……また面倒なことを考えたな」

「まあ良いじゃないですか。で、許可してくれるんですか？」

「まあ部員が揃ってる以上文句は言えないわな」

そう言っただけ職員室の方へ歩いていく夜行。よし、これでこれからどんどん遊んでも文句は言われなぞ！

「やったー！じゃあ早速遊ぼうよ！」

「良いわね」

「何する？」

「ここはもちろん……」

「コラ！楽家君！廊下は走ってはいけないと何度も言ってるでしょ！！」

あ、やっぱり鬼ごっこは怒られるか。

火曜日は番外編。いきなりRPG？

「あれ？ここどこだ？」

僕が目を開けると町の中にいた。それも日本ではなく外国っぽいところ。もつと言うと中世ヨーロッパっぽいところ。

なんだか人が沢山いる。ここは市場か何かかな？会話を聞く限り言語は同じみたいで良かった。

うおっ！あっちにはお城まで見える！

うーん。こういう風景どっかで見たことあると思うんだけどなあ。

「おいこら、邪魔だよクソガキ」

「あ、すみません」

どこからか来た変なおっさんに注意されてしまった。というかこの人外国人？

そりゃ道端で寝てたら邪魔にもなるか。反省反省。

「ってそんな事言ってる場合じゃない！ここどこ？なんでこんなところに居るの？」

そつえば昨日こんなゲーム買ったような……。もしかして異世界トリップもの？

「作者め、最近ネタがなくなってきたな」

「こんなことないわボケ！殺すぞ！」

「わっ、何この声!?!」

周りを見渡しても人は居ない。というか今頭の中から聞こえてきたような？

「おはようございます。私、今回の案内をさせていただくことになりました踏鞴です」

「え？案内役ってどういうこと？そして何故に作者名？」

「ちっ！んなことどうでも良いだろ。話が全然すまねえんだよ。」

「ここは今日お前の買ったゲームの中！んでお前は勇者！さっさと魔王を殺しに行くぞ」

「うわー展開急すぎるよ。前回までの話にどうやってつなげるの？と言うか最初の丁寧さは一体どこへ？口調乱暴すぎるでしょ」

「そういえばこんなゲーム買ったなあ。まさかゲームの中に入ってしまうとは思わなかったけど。」

「ああ、違う違う。今回は夢オチだからそう言うことじゃない」

「いきなりそんなこと言うなよ！」

「まあ番外編だしね」

「だからそういうことも駄目だってば！というかこの小説において番外編ってなに!?!いつもと何が違うの!?!」

）……………）

特に変わりは無いらしい。

そんな感じで現在森。

くぱーぱーぱーぱーぱーぱー

「うるさいよ。自分で効果音言わなくていい」

くあ、そう？雰囲気出ると思っただけ？

どうでもいいわ！

《魔物、ニクダンゴが二体現れた!》

そこに現れたのはデフォルメ化こそしていたが、確かに谷口先生だった。しかも二人。

「敵、教師かよ!というかなんで一回しか出てこなかったのにこんな所で出て来てんの!?しかも二体!恐いわ!」

あ!というか僕装備がパジャマだ!全く持って勝てる気がしない!

くあ、言い忘れてたけどこれ逃げられないから

「さりげにひどい!」

《ゆづきのこうげき、かいしんのいちげき、てきに4のだめーじ。》

「僕弱!」

くまあ、装備がパジャマだからねえ

《ニクダンゴその1はたおれた》

「敵も弱かった!」

《ニクダンゴその2のこうげき。ゆづきに80のだめーじ》

「ちょっと待って!なんで攻撃力そんな高いの!?」

《ゆづきはたおれた》

「ちよつとー！僕死んじやったよ！この先どうすんのさ！」

「俺のターン！ドロー！」

「あれ？なんか違うね？」

「死○蘇生！遊喜をこの場に召還！」

「それ遊○王だから！全く関係ないから！」

《ゆうきはよみがえった。ゆうきのこうげき、ニクダンゴその2に2のためーじ》

「読みづれえな」

《ニクダンゴその2はたおれた》

やっぱり弱いなー。特に防御力。

どうつでもいいけれど普通こういうゲームって敵が死んだら消えるもんじゃない？なんで血まみれでその場に留まってるのさ？知り合いの死体とか気持ち悪いんだけど。

《ピヨーン。ゆうきはレベルが2になった。こうげきりよくが5あがった。ぼうぎよりよくが4あがった》

「おお」

《すぴーどが128あがった。》

「上がり過ぎじゃね!?!」

《しんちようが12さがった。かけざんをおぼえた。けんたいかんをおぼえた》

「身長下がっちゃった!しかも結構!そして掛け算ぐらいできるわ!舐めんな!」

……けんたいかんってなんだろう?

くっひゃひゃひゃひゃひゃ!随分身長が低くなったなあ!パジャマがぶかぶかだぞ!」

現在、身長150cm。女子にも負ける!

「うるさい!さっさと元に戻せ!」

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!」

「だから笑ってないで!」

く俺じゃねえよ

「え?じゃあ誰?」

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!楽、面白すぎ!」

「詩杏!?!」

近くで笑い転げていたのは俺と違って立派な甲冑の装備をした詩杏だった。

「あー笑った笑った。もう今年の残り分ぐらいは笑った。楽、どうしたの?その体、なんだか可愛くなっちゃってるけど。携帯用?」

うるせえ。まだお前よりはでかいわ。

「もしかして敵？」

「違うぞ。こいつはパーティー要員だ」

「ああ、敵意外にもいるんだね。にしても詩杏、その甲冑どうしたの？」

「市場で買ったんだよ。楽ちゃん」

「くっ！てめえ！身長が同じぐらいになったからって調子にのるなよ！」

「ああ、その手があったね。今から引き返すか。ねえ踏鞴、僕って今ここのお金どのぐらい持つてるの？」

「お前の貯金から切り崩しだぞ」

「はあ！？なにそのシステム！？誰が買うか！」

「ならさっさと行こうか」

詩杏がサーベルを振り回しながら言う。

僕も武器ぐらい欲しいな。

「武器ならあるぞ。手持ちを見てみる」

「え！？ほんとに！？」

武器 野球帽

「武器じゃねえよ！」

く不満か？

「当たり前だ！こんなもん装備ですらないじゃないか！野球少年しかこんな装備喜ばないよ！」

《魔物、お・いかーわと、よしー・わらーがあらわれた》

こんな時に敵来たー！

そして名前が適当だー！と言つか先輩！

「じゃあ餡子ちゃんは及川やるから楽は吉原お願い！」

詩杏はダツシユでデフォルメ化された及川先輩へと走り出す。

「まって！僕の装備を見て者を言ってる！？絶対負けちゃうって！
というか一応名前変わってるからそこら辺はお願い！」

くこの時はまだ、魔王の恐ろしさを誰も知らないのであった。まさか遊喜があんなことになるつとは

「変なモノローグ語ってんじゃねえよ」

くつづく

「続くの！？」

火曜日番外編

え！？これまだ続くの！？

〽前回までのあらすじ。

レベル95の強敵、マアダンコバスを倒すことに何とか成功した詩杏だったが、惜しくも仲間の遊喜が石に躓き死去。しかし詩杏が蘇生の呪文を唱えるとそこには前より一層強力になったマアダンコバスが出現。詩杏は一体どうなるのか！？そして2時から始まるアニメまでには間に合うのか！？

「全然違うだろうが！」

〽あ、ばれた？

「ここまで本当のことを一つも書かないで信じる奴なんかいないわ！突っ込みどころ多すぎだし！まず何で詩杏が主人公！？僕の夢の中でしょ！？あと僕に至っては石につまずいて死ぬのかよ！普通に嫌だし！そして敵を蘇生させんな！僕のためじゃなかったの！？」
「へっ！誰がお前のためなんかに」
「詩杏んんんん！？なんかキャラ変わってんぞ！」

〽にしてもここらへん魔物全然いねーな

「話を逸らすな！」

「ほんとだね。もうすぐラスボス登場だって言うのに困っちゃうに

よ

「こよ。じゃねーよ」

「困っちゃうにゃ」

「猫！？」

「困っちゃうぬ。あ、違うや、にゅ」

「言いづらいなら言わんでよろしい」

ふむ、でも確かに深刻な問題だな。これじゃあレベルが上げられられ無くてラスボス戦が厳しいぞ。

「ああ、わりいな。俺があらかたやつちまった」

「ああ、なんだ桂馬があ。って桂馬いたの!？」

そこには魔法使い(?)の格好をした桂馬がいた。なんかみんな装備よくね?僕パジャマなのに……。

「桂馬も重要なパーティーメンバーだぞ」

「まあこの格好見れば大体わかるけどね」

「おう、医者だ」

「絶対違うだろ」

「黙れミニ遊喜」

「うるさい!もうみんな忘れてるかも知れなかったんだからいらん事いうな!」

《魔物、まいとせんがーがあらわれた》

「あ、魔物だ」

「てめえ案内役だったら出てくる前とかに気づけや!何のためにそこにいる!」

「っていつかまいとせんがーって舞と碑霧千駕だったんだにや」

「本当だ。まあ舞ならともかく碑霧ならなんとかなるな。詩杏と遊喜は舞の方相手してくれ」

因みに舞ちゃんも碑霧さんは悪魔っぽい装備。なんか羽生えてるし。中ボスかなんかかなあ？

「遊喜、あんたはここで死んでもらうわよ」

「ふっ、僕だつて成長したんだ！」

まだレベル2だけど。

《ゆうきのこうげき。まいに12のためーじ》

おお、二桁になった。

《まいのこうげき、ゆうきに1800のためーじ》

「僕死んだー！」

なんと本日二回目！そしてどちらも一撃！僕弱すぎってか敵強すぎだろ！

「はあ、じゃあそこから見てよ」

「ちよつと待つてえ！主人公僕！のけ者にしないで生き返らして！」

「分かった分かった。じゃあラスボス倒したら教会連れてってやるから」

「遅い！そのあと僕なにすりゃいいのさ！

「うっせーなお前は。待つてろ、今生き返らしてやつから」

僕と詩杏が話していると横から桂馬が割り込んできた。まあ生き返れるなら誰でも良いけど。

「って桂馬もう終わっての!?!」

桂馬の方を見るとすでに勝敗は決したようだ。碑霧さんの姿が見当たらない。

「ん。魔法『甘い言葉』だ」

「桂馬くんっ。これあれば生き返ること出来るよ？」

すると碑霧さんが桂馬の元へ走ってきた。まあこれ自体は別に普段行われてることなんだが。

っっていうか絶対それ魔法じゃねえよな。ただ物頼んだだけだよな。

「よし、じゃあ遊喜。これ飲め」

「いいけど何これ？」

桂馬が渡してきたのは黒々とした液体。わ、やっぱり飲みたくない。

「良いから飲め。生き返るらしいぞ」

「うわ！ぐむむむむ」

無理やり口に入れられた。

「ただし激しい苦痛が伴うけどねっ」

「うがあああああ！全身が！焼けるように痛いいいいいい！」

《ゆづきはいきかえった》

ああ、痛かった。なんで夢の中までこんな思いしなくちゃいけないんだ。

そっいえば舞ちゃんと詩杏どうなってるかな？

《まいのこうげき。しあんに87のだめーじ》

《しあんのこうげき。まいに123のだめーじ》

《まいはかいふくじゅもんをとえた。1600かいふく》

《しあんのこうげき。かいしんのいちげき。まいに310のだめーじ》

「なんかめちゃくちゃレベル高い勝負になってる!」

「はあはあ、なかなかやるわね」

「舞もね」

「でも、次の一発で勝負を決めさせてもらっわ」

「それはこっちの台詞だよ」

お互いに武器を構える。

「うあああああああ!」

そして、その日一番大きな音が響き渡った。

《まいとしあんがたおれた》

「お前ら主人公とそのライバルか!」

「えっ!死んだの?」

「ありや、まあ私は魔物だから復活できないわね」

「楽ー。餡子ちゃんだけでも復活させてー」

「やだ」

「ひどーい!楽が倒れた時は餡子ちゃん助けてあげたじゃん!」

「僕は碑霧さんに助けられた。かつてに記憶の改竄すんな」

まあ助け方はロクなもんじゃなかったけれど。

「さつさといっごぜ」

「桂馬くんの言つとおりだよ。はやくしなさい楽家遊喜」

そんな感じで僕（パジャマ）と桂馬（自称医者）と碑霧さん（敵）のパーティーでラスボスに挑むことになった。なんだこれ。

く魔王城だぜ！く

「ねえ、これっていきなりラスボス？」

「まあ最上階まできてだれもいなかったしな。そろそろ登場人物が居ないんだろ」

「それだったら、15階までつくんなつー話だよ。つかれてしゃーねー」

碑霧さんが疲れて桂馬の前で本性が戻りつつある。まあ桂馬は碑霧さんの本性なんて知ってると思うけど。

「じゃあラスボス誰だろうねえ」

「うーん。まあ妥当なところは山田先生じゃね？」

「ああ、そういえば出てきてなかったね。で、案内役！そこんどこうなの！？」

く知るか。俺に聞くな

「お前本当に何しにきたんだよ！」

くあ、もう来るぜ

あ、ホントだ。人影が見える。えーと、あの影は……。

《ラスボス、あかみやかながあらわれた》

「……勝てる気しない!!」「」

三者口をそろえて同じ事。まあ当たり前。この人に勝負を挑もうと思ったら百人単位で人を連れてこないといけない。夢の中とは言え三人で勝てるか!

「安心しろ、こういうときの為に対ラスボスよの武器を持ってきた」

「安心できねえよ。前回野球帽だったじゃん」

「ふっふっふ。聞いて驚け。今回はグローブだ!」

「だから全然安心できねえよ!なんで本格的に野球始めようとしてんだよ!できればまだバットかボールの方がマシだったよ!」

「そのグローブには特殊機能が付いている。ほら、どんどん光ってきたらどう?」

「おお!なんだこれは!?!」

「もっとグローブに集中するんだ!気合を送れ!」

「分かった!やってみる!」

僕はグローブに気合をこめる。そうすると、不思議とグローブの光が強くなった気がした

「じらー！楽！意図的に無視してるだろ！」

ばっちん。

いきなり頬を殴られた。なんだ一体！？

「いったー！って詩杏！？」

薄暗い部屋の中。

僕の体の上にはニヤニヤ笑っている試案が乗っていた。

火曜日は番外編。 え！？これまだ続くの！？（後書き）

次回、詩杏と遊言が町をぶらぶらしまーす。

要するにまだ具体的には何も考えていません。

気まぐれな水曜日。 サボタージュってフランス語なんだって

「……………」

思考停止。

落ち着け、落ち着け僕。

ここは僕の家で僕の部屋だ。昨日は普通に帰って寝たし、そもそも詩杏は学校に来てなかった。故に詩杏と関わりは昨日は持っていない。当然戸締りもちゃんとしたはず。まあ父さんが母さんがやったから確かなことは知らないけど。

なあんだ、まだ夢の中か。

「こらー！ー！また寝ようとするなー！ー！」

ばっちーん。

「痛い！何すんだ！」

「楽が寝ようとするのが悪い。現実を受け止める。餡子ちゃんは確かにここにいるぞ」

夢じゃなかったのか。くそ。

「何でここにいる。どうして部屋に入ってこれた。そして今何時だと思ってる」

「にゃー、楽はつれないな！。家にはお母様に頼んだら普通に入れてくれたよ。そして今は5時半」

母さんはなにしてんだ。
というか何故にこんな時間から起きてんの？

「でさー、楽ー出かけようぜー」

詩杏が僕の体をゆっさゆっさと揺らす。あれ？今このチビなんて言いやがった？

「だからー出かけようって」

「いや、今日学校だし」

「関係ないよ」

「お前はな」

「学校なんて行っただって行かなくなっただって変わらないよー。ただ制服着るか着ないかの話だよ」

「なんだその理論!？」

すでに詩杏は不登校児末期だった。

最善を尽くしたのですが……手遅れです……。

「餡子ちゃんが楽の服選んたげる」

そういつて僕のベットからぴょんと飛び降り、そのままダンスを物色する。

もう注意する気にもならねえ。

ちなみにそう言う詩杏も私服。こいつはどつ見ても小学生にしか見えないから平日にぶらぶらするのはどつかと思つ。

「っっていうか詩杏、何でまたいきなりそんなこと言い出したんだ？」

「んー？気分」

……………なんじゃそりゃ。

まあでも確かに学校行くのも面倒だし、もうすぐ冬休みだし（理由になってないけど）結局僕は詩杏についていくことにした。学校には風邪って言った。

「で、詩杏。僕達は一体どこに向かっているの？」

電車の中。僕は目的地さえ分からない。

「んー？遊園地ー」

「平日開いてんの？」

「多分」

多分で。不安だな。

『やあ！ここは愛と夢と著作権侵害の国ディズニールランドだよ！今日はみんな楽しんで言ってるね！』

僕らがその遊園地に入っていた時、まず声をかけられた。
ミッシーみたいなネズミの着ぐるみを着た人に。

「詩杏！無理だよここ！愛と夢と著作権侵害の国って謳ってるけど今のところ著作権侵害しか見当たらないよ！」

「なーに言ってるの。まだ入ったばかりじゃん。これからだよ。ね、ミッシー？」

「お前もミッシーって言ってるじゃん！」

『そこのお嬢さんの言つとおり！大丈夫さ！ちなみにボクの名前はムッキーです』

「なんだか筋骨隆々そうな名前だね！」

なぜ詩杏が楽しそうにしてるのか分からない。

というかやっぱり学校行ってた方が良かったかも。

『さあ！最初のムッキーのお勧めはこちら！』

そう言っつてムッキーが手で示したのは立派なジェットコースター。
なんだ、アトラクションはちゃんとしてるじゃないか。

『その名もFUJIY……』

「ここ富○急ハイランドじゃねーだろうが!」

あぶねえ。というかびっくりした。やるならデイズ○ーランド仕様にしろよ。名前なんてほとんどパクってるんだから。

「じゃあ楽!あれ行こう!」

そう言っつて詩杏が引つ張っつていったのは、お化け屋敷。うわ、僕こ
ういつの苦手なんだよな。

というかムツキーの言っつこと完全無視か。

『やあ!ワタシの名前はムキー。このお化け屋敷に入りたいの?だ
つたらワタシを倒していくことね!』

いきなり物影からハイテンションで現れたのはこれまたミ○ーのパ
クリであるう着ぐるみを着た人物。というかなんでお化け屋敷はい
る前にお前と勝負なんてしないといけないんだ。

『勝者には豪華景品、鏡餅一年分よ!』

「鏡餅つて普通一年に一回しか使わないだろうが!」

「わっほーい!やるやるう!」

なぜか詩杏はハイテンション。まあいつもの事か。

「ムキー、勝負つて何やるの?」

『これよー!』

じゃーん。と、ムキーは自分で言っつてから隠し持っつていたであらう
その縄を高々と上げた。

おいしいおいしい！！なんかムキー大変なことになってんぞ！吐きそうなんだつたら止めるよ！着ぐるみの中で吐いたりなんかしたら大変なことになるぞ！

『……………もう、……………だ…め…』

あ、ムキー倒れた。やった、僕の勝ちだ。

と思ったら、詩杏が倒れたムキーに近づいていった。

「ムキーー！！！」

『はあはあ……………よく、このワタシを倒したわね』

「ムキー！喋っちゃ駄目だよ！今すぐ救急車を！」

『いいのさ、自分の最期ぐらい自分でわかる……………』

「そんなことはわからないじゃないか！早く、ムキーの治療を！」

『ふ、敵にまでそんな優しくしてたんじゃないかこの先が思いやられるね……………ワタシは四天王最弱、…いわば雑魚だ、そんな調子じゃこの先に控えているワタシの兄妹たちを倒すことは出来ないよ』

「でも……………」

『いいかい、よく聞くんた。確かにワタシ達は敵だった。でも、…

…なかなか楽し……………かった……………よ……………（ガク）』

「ムキイイイイイイイイイイイイ！！！」

「いい加減にしるおおおおお！！！」

とりあえず詩杏にとび蹴りを食らわす。もう女子とか気にしない。

「何すんだよ楽」

「何すんだよじゃないよ！何今の茶番！？というか突っ込むタイミングが分からなくて結局最後まで待つちゃったし！」

「ムキーはね、風になったんだよ」

「黙れ、ムキーなら今そこにいるから」

「んじゃ、最後はやっぱり観覧車でしょ！」

まだ乗るのか……。

あれから、ジェットコースターのってコーヒークップのってなんだ
かか良く分からん飛行機みたいな乗り物のって、迷路に入って、そ
の他諸々沢山やってこれである。

疲れた。

これが僕の正直な感想。

まあでも観覧車だったら疲れないか。ってことで許す。

『ぶはははは！観覧車に乗りたくばこのムツキーを倒してから行け
えい！』

うわ、また出たよ。

「もう、うざい」

『うげ』

流石に詩杏も疲れたのかムツキーにチョップしてそのまま観覧車に
乗った。おい、そんなことして良いのか？

「何してんの楽？早く乗らないと行っちゃうよー」

「あ、うん。今行く」

乗ってみて分かった。結構高い。

ここの遊園地はほとんどパクリなのり高性能で仕方が無い。まあ僕
としてはありがたいかな？

自堕落な木曜日。 大切なことほど忘れやすい

今日はどうやら詩杏が学校に来ているらしい。

……保健室が異様に騒がしかった。

しかし最近なにかと詩杏と絡むことが多いな。前回だってその前の番外編だって一番僕以外で一番出てたの詩杏だしなー。もしや詩杏ルート!?

やだなそれ。僕は舞ちゃん一筋と心に誓っているんだから。

そう思いながら僕は第二美術室に向かう。

『でねー、そんなときに楽と一緒に遊園地いったんだけどさー』

あ、噂をすれば美術室から詩杏の声。

『なに?あの日遊喜つてば学校来ないで遊んでたの?』

やばい、舞ちゃんが怒りモードだ。

『まあ餡子ちゃんが誘ったんだねどねー』

『なんでまた』

『うーん。親戚に遊園地の割引チケット貰ったんだけどさー、男女ペアじゃやいと駄目みたいなんだよねー。桂頼んだら殴られたし。楽ならまあ餡子ちゃん喧嘩勝てる自信あるしねー』

「僕は桂馬の代わり!？」

思わず扉を開けて突っ込んでしまった。でもショックで仕方ない。桂馬に断られたからなのか……そうなのか……。

「うわ、楽、いたのか」

「遊喜、盗み聞きとがあり得ないわよ」

「僕だっけしてたくてしてたわけじゃないやい!」

たまたま聞こえてしまっただけだ。

「うーん。やっぱり写らねえな」

あれ?この声は碑霧さん?なんで第二美術室なんかにいるんだ?というかなにしてんだ?

「いや、あたしここの部長だろうが」

「そうだったけ?」

ゴンッ

「……う、うそだよ。そんなこと忘れる訳ないじゃないか。ははっ、ジョークさジョーク」

「……」

今だ碑霧さんのジト目が怖い。っていうか殴った時点で許して欲しい。

「ういーす。ってなにこれ?」

おお！救世主（碑霧さんが怒っている時だけ）がきた！これでまあなんとか助かったよ！

「あ、桂馬くんっ久しぶりっ！ 24分と32秒ぶりだっ！」

「なんでそんな細かい数値がでんだよ！」

僕の予想通り。碑霧さんは桂馬の元へ駆けていった。にしても桂馬の言うとおり、なんだこれ？

僕らが約半年使ってきた第二美術室に、テレビが運ばれていた。残念ながら薄型ではなく、地上デジタル放送には対応してなさそうだし、にしてもなんでこんな物。

「餡子ちゃんが拾ったのよー」

詩杏がニシシと笑いながら言った。こいつ、その矮躯でこのテレビ三階まで運んできやがったのか。半端じゃないな。

「それはいいんだけどよお、何故か点かねえんだよ」

口調を戻して碑霧さんが言う。

「もしかしてこの町だけ地上デジタル放送に完全移行しちまつてんのか？」

「それ、2011年7月以降は使えないネタだね」

「おう、だから早めに」

わかってて言ったのか。なんかいやらしい。

「そりゃ点かないだろ。テレビはコンセント刺せば点くってもんじ

やないからな」

しばらくそのテレビを見ていた桂馬が言った。

「ええっ!?! そうなの!?!」

「俺も詳しくは知らんが配線とか場所とかそう言うの大事らしい」

「しょぼーん」

詩杏が見るからに落ち込んでいる。ふむ、しかしどうしたのだろうか。

「いやーね。最近餡子ちゃんよく学校にくるじゃん。それでそれだと笑っていいともが見れないから」

「諦める!」

そんなことでそこまで落ち込むなよ。ちょっと心配した自分が馬鹿みたいだ。

「元々馬鹿だろ」

「やめて。いちいちそういう発言に突っ込まないで。話が進まない」

というか僕発言すらしてない。

(千)「さっきも言ったけどどうせここで出来ても来年にゃ見れねーぞ」

(杏)「うにゅー。どうしよっ?」

(桂)「いや、諦めるよ」

(舞)「ワンセグは?」

(楽)「ここら辺田舎だからね。基本的にうつんないよ」

(桂)「そういえば俺ん家結構な確立でうつるぞ」

(杏) 「え！？マジ！？今度桂ん家行つて良い！？具体的には昼休み辺り！」

(千) 「あたしもっ！」

(桂) 「いや、それ自分ち帰れよ。テレビあるだろ。そして碑霧は全く関係ねえな」

(楽) 「職員室いけばー？テレビついてることあるよ」

(杏) 「おお！それいいね、流石楽！」

(舞) 「てか、明日から冬休みってことみんな忘れてない？」

「「「あー。そういえばそうだった」「」」

みんな(舞ちゃん以外)の心が一つになった瞬間だった。

今さっき終業式してきたばかりなのにね。

「じゃあこれも無駄じゃねえか！どうしてくれんだゴラァ！」

「僕に当たらないでよ碑霧さん！」

にしても明日かあ。何しようかしら。

去年の冬休みは受験勉強で忙しかったからなあ。今年は桂馬たちと遊びたいな！。

「勝手に記憶の改ざんしてんじゃねえよ。去年も遊びまくってただろっが」

「だっけ？」

「そっだ」

全く覚えていない。自分の中ではやった方だと思ってたんだけど。

……にしても碑霧さんの機嫌がさつきからすこぶる悪いな。だいたいどうぶかな？なんか叫んでるけど。

「だああああ畜生！死ね！」

……なんでテレビに八つ当たりしてんだよ。彼には罪はないよ。と
いうかここに桂馬いるってこと忘れてるでしょ。

「あ、点いた」

「嘘!？」

蹴ったら直るとか昔の漫画かよ。まあこのテレビ古いからそういう
ギャグが通じるのかも。とか。

見れば、それにはニュースがやっていて、どこぞのテーマパークの
特集なんかをやっていた。

「……………ねえみんな」

そんな折、詩杏がポツリと呟く。

「冬休みっていうのはみんなも暇になるんだよね」

あー。そう言うことか。うんわかった。全部分かった。

「……………」

どうやら冬休みは退屈しなくて良いようだ。

新年の月曜日。 赤

僕の世界は赤かった。

その赤は血の赤。

そして、僕の周りにはもう動かなくなった人間が沢山いた。

その中で立っているのは僕一人。

僕だけが、生きていた。

そうか。これは僕の仕業か。

「ってどんな初夢だよ!!!」

ガバツと言う音が聞こえそうな勢いで僕は飛び起きた。低血圧の僕には珍しいが寝ぼけてはいないようだ。

全く嬉しくないが。

……新年明けましておめでとございます。

そう、今日は1月1日。今年初めての日です。

時計を見れば、まだ9時前。

「いやー、初夢があんなのとかどんだけ縁起悪いんだよ。去年は特に悪化した記憶ないぞ。いや、そういえば今日見る夢が初夢って言うてたような？まあどっちにしる新年早々気分悪いことこの上ないんだけどね」

そんなことを言いながら僕は着替える。例年どおりなら寝正月で新年を過ごすはずなんだけど、さっきの夢のせいでもう寝る気になれない。

それにしても流石に一月は寒いな。結構厚着しないと。

そんな感じで僕が洋服ダンスを漁っていると、

僕の部屋の扉が蹴破られた。

「朝だぞー。起きろ。ってなんだ、早いじゃん」

「母さん何してんの！？なんで僕を起こすためだけにドア蹴破つてんの！？完全に壊れてるじゃん！どうすんのさ！」

「大丈夫、お年玉があるだろ」

「嫌だからね！？僕のお年玉はドアの修理には使わないからね！？」

といかか母さんが壊したんだから自分で修理費だせ。

「それにしてもせっかくの冬休みなのになんでゆーきこんな早く起

きてんだ？」

「いやあ、ちよつと悪い夢を見ちゃってね」

「ふむ、日ごろの行いが悪いからか」

「子どもが親殺す場合って刑どのぐらいになるんだっけ？」

「凶器を探すな。大丈夫。そんなゆーきも今年一杯幸せになれる必殺アイテムを紹介してやろう。2万8千円だ」

「自分の子どもに変な物売りつけんなよ！絶対偽者だろ！」

「青酸カリ」

「くそつ、お金が足りない！」

豚の貯金箱を割ってみれば、お金は4020円しか入っていないなかった。

「おいそれ、お金が足りたら買うつもりだったのか？誰に使うつもりなんだ？学校でいじめられてんのか？」

「強いて言うならあんただよ！」

まあでもお金が足りたとしても買うつもりはなかったけど。だってあれ、絶対偽者だし。

「というか今時豚の貯金箱ってどうよ」

「うるさい。僕の趣味に口をだすな」

近くで見ると結構可愛いんだよ。

「それを今粉々にしたんだけどな」

「うん、ちよつとノリで」

「なるほど、ノリノリで」

「それは違う」

「そんなゆーきにいいアイテムがあるぞ。瞬間接着剤」。8200

円

「高い！だったら新しいのを買っ！」

「豚の貯金箱」。4万」

「だから高いってば！」

だから僕の手持ちは4020円だ。

普通に百均で売ってるのとかで良い。

いや、でも年始で百円とは言え無駄な出費は避けたいな。

「そういえば母さんが起こしに来ることなんて珍しいね。いつも寝過ぎす方が悪い、なんていつてるのに」

「うん、さっきゆーきの友達から電話かかってきたから。呼びに

ってあれ？ゆーきそんなに慌ててどうしたの？」

「なぜそれを最初に言わない！」

僕はドタドタと階段を駆け下りる。

くそっ、無駄に話し込んだじゃったじゃないか！

家の電話に直接掛かってきたってことは多分その前にも僕の携帯に電話してるってことだ。それで出ないから家の電話にかけたのか。

ってことは中学校前からの知り合いの舞ちゃんか桂馬か詩杏か。

舞ちゃんに嫌われるのは嫌だから桂馬であって欲しい。

「ごめん！遅くなった！」

『遅いわよ。死ね』

舞ちゃんでしたー！

そしてもんのすんごく怒ってるー！

「ごめんごめん、ちょっと身なりを整えてたもんで」

『電話での優先順位が間違ってるわよ』

「で、何の用？」

『明日から二日ほど予定ある？』

「え？ないけど……もしかしてそれってデー」

『デートじゃないわよ。冬休みまえに詩杏が言ってたお出かけのこと。結構遠そうだから二日にわたっていくんだって』

「ホントに！？やったー！」

『あ、でも一応親にも連絡とってよね。詳しいことはまたメールでもするから』

「うん分かった」

そういつて電話を切る。ふむ、明日とは些か急だがこの際関係ないね。多分両親も特に引き止めるようなことはしないと思うし。

うち、初詣に行かないし。

まあでも一応聞いてみるか。

「かーさん。明日からちょっと泊まりで出かけることになりそうなんだけとだい……」

「行って来い」

大丈夫だとは思ったけどまさか全部言う前に返事が返ってくるとは。どんだけうち暇なんだよ。

……それとも僕が邪魔なだけ？……いやいやそれはないか。

「ふう、新年早々良いことあったな。おみくじも伊達じゃないってことか」

まさかその良いことって僕のことじゃないよね！？そうだよね！？おみくじって聞き違いだよね！？僕の家では初詣言っていないよね！？

激戦の火曜日。 馬鹿なっ!?

「やつほー！舞ちゃんあつけおめええぶおおおおお！！」

殴られた。

予想通り。

まあ抱きつこうとした僕が悪いんだけどね。

「くそ……新年初キツスが……」

「あんたそんなこと考えてたの!？」

地面をのた打ち回ってる僕にさらに追い討ちをかけるように蹴りを放ってくる舞ちゃん。ああ、今日スカートなんだから中が見えちゃうよ。

……顔が、熱くなってきた。

「そして去年はやってたみたいに言っな！ 誰ともしたことないわ
！」

舞ちゃんの突っ込みはまだ続く。

「まあまあ、せっかくの旅なんだから落ち着いて」

止めに入ったのは桂馬。流石良い仕事をする。

「続きは電車の中で」

ころすぞ。

「それにしても楽、来るの遅いよー。餡子ちゃん待ちくたびれちった」

そういうのは勿論詩杏。これで桂馬とかだったら超恐い。想像もしたくない。

「ああ、ごめん。寝坊しちゃって。それにしても詩杏、今日は起こしに来てくれなかったんだね。来るかと思ったのに」

最近詩杏は3日に一遍ぐらいの割合で僕を起こしに来る。まあその後は遊んだりなんなり。

「うーん、行こうとしたんだけどねー。餡子ちゃんも結構ぎりぎりだったから」

「へえ」

まあそう言う日もあるだろう。

「まさかあそこで卵焼きが焦げるとは」

「何？まさかいつもはパン買うくせにこういう日に限って朝食自分で作ったの？」

「卵12個分。時間にして約48分」

「馬鹿だー!!」

しかも約とかいってる癖にやけに正確。

「おいおい、そんなことより早くいかねえか？ 電車行っちゃまっぞ」

そう言うのは今日も桂馬一直線の碑霧さん。なんだか最近桂馬の前でも男口調が多くなってきた様な。

「あ、そうだね。いこう」

「お前をまっただけだな」

そうでした。

「うほほほほほーい！電車なんて初めてだー！」

「ここで騒ぐのはやっぱり詩杏。おい、他のお客さんに迷惑だろうが。」

「というか前僕と遊園地行った時も電車乗ったよね」

「……………電車なんて“今年”初めてだー！」
「無理やりでしょ」

そして今年は始まったばかりです。はい。
詩杏がはしゃぎまくって飛び跳ねている。いやいや、そんなに飛んでたら、

「ちょっと詩杏、そんなに飛んでたら空中にいる間に走ってる電車に激突しちゃうよ」

「……………」

あれ？なんか変なこと言ったかな？

「おい、遊喜。慣性の法則って知ってるか？」

桂馬がこいつ大丈夫か？ 見たいな表情で聞いてくる。失礼な、それぐらいは知ってるさ。

「勿論、電車が急にとまると前に引つ張られちゃう法則のことですよ？ でも今走ってるから関係ないよね」

「馬鹿だな」

「バカね」

「本当にな」

「死ねば良いのに」

「ちよつと！どついうこと！？そこまで言われる筋合いはさすがにないよ！」

結局何も教えてくれなかった。……………グスン。

「いやあ着いたね！日本！」

「元々いたけどな」

さっそく僕らはホテルにチェックイン。そういえばこれってどれぐらいかかるんだろ？お金。母さんから貰っては来ただけどまだ不安

だったり。

「ねえここってどれぐらいかかるの？お金」

「んー二千元」

「安っ！」

びっくりしたわ。ていうか冗談だよな。流石にそこまで安いと不安になるんだけど。

「ああ、俺の親戚がこのホテルのオーナーやってるから多少は大目に見てくれるんだ」

「多少じゃない気がするけどまあそう言う理由ならいいか」

そつえば桂馬の家何気にお金持ちだったよな。

「まあ親戚つつつてもこないだ初めて会ったんだけどなー」

「不安っ！」

そんな感じでお部屋へゴー。

部屋割りには僕と桂馬、舞ちゃんと詩杏と碑霧さん。まあ当たり前だ。

そしてすぐにホテルを出て今回の旅行の目的である全国的にもそれなりに有名な何とかランド（名前忘れた）へ行くことに。行くことに言うかここからかなり近いんだけど。徒歩でも10分かかかるかからないかぐらい。

それにしてもこの小説には珍しく何かと移動が多いな。体力の無い僕には辛いところだよ。

「づいだあああああああああー!!」

言わなくても分かるよね。詩杏です。もう感動してんだか興奮してんだか分からないけどとにかくこれだけは言っておこう。と言っか注意しないとね。じゃないとまた詩杏調子に乗るから。

「うおおおおお!! ホントだあああああー!!」

スンマセン。僕も興奮してます。

「うるさい。他の人たちに迷惑でしょ」

おっと舞ちゃんが少し怒ってる。

「ごめんごめん」

「まったくでし」

「詩杏もさっきまで騒いでたたる」

「そんなことないでし」

というか誰だよ。口調を戻せ。

というわけで(どういう訳で?)受付を済まして園内へ入る。流石に冬休み真っ只中とあって結構な数のお客さんが居た。これじゃあ並ぶことになりそうだねえ。

「というか詩杏、前遊園地に行った時も気になったんだけどさ」

「ん?」

「身長制限大丈夫?」

「そこまで小さくないやい！」

前回は絶叫系そこまで乗らなかつたから気にしなかつたけど、今回はそういうアトラクションが多くて一応心配してただけけどどうやら詩杏を怒らせてしまったみたいだ。

「そんなことより早く乗りましょ」

「ああ、うんそうだね」

舞ちゃんがせかすように声をかけてきた。見れば本当にワクワクしている。これは見ただけで分かる。舞ちゃんの新しい一面発見。

「何に乗りたい？」

「あつ、あれがいい！ あのジェットコースターが良い！」

わー、なんだか舞ちゃん幼児退行してる気がするけど気のせいかな？ というかお化け屋敷は駄目だったのにジェットコースターは大丈夫なんだ。まあ別物だしそりゃそうか。

「うん、じゃあいこうか。桂馬ーってあれ？桂馬は？」

「さつき碑霧千駕に連れられてどっかいったよ」

「なんだ詩杏、見てたんなら教えてくれればよかったのに」

「あまりにも速いスピードだったから……」

「さいですか……」

まあいいかここは三人で楽しもう。碑霧さんたちの邪魔しても悪いしね。（桂馬の気持ちは気にしない）

「ってことで舞ちゃん。行こうか」

と、舞ちゃんのほうを向くと、そこには誰もいなかった。

「って待って！置いていかないで！」

僕は舞ちゃんと詩杏が歩き出し方へ向かって走り出す。

5時間後。

「ああ、疲れた」

「と言うか詩杏、はしゃぎすぎよ。私の体力が持たないでしょ」

「にっしっし、お二人さん。これぐらいでべばってるようじゃあ、駄目ですね？」

「今日は楽しかったねっ、桂馬くんっ」

「ああ、無駄に疲れた気がしないでもないけどな」

うん、まあ最終的にはみんなで遊んだよ。

碑霧さんの視線が痛かったけど。

「どわふ」

「あー疲れた。どうする遊喜、もう寝るか？」

ただいま午後十時、高校生の僕らが寝るにはまだ早い時間だ。でも、……ねみい。

「寝るか」

「おお、じゃあ電気消すぞ」

桂馬が明かりを消そうとしたその瞬間。

「ちょっと待ったーっ！」

……と言う声がドア越しに聞こえた。……オートロック式だしね。入れないもんね。

「おい、周りのお客さんに迷惑になるだろ」

桂馬がドアを開けながら言った。すると、それと同時に、三人の間が、と言うか舞ちゃんと言杏と碑霧さんが入ってきた。

「修学旅行の夜といえばこれ、枕投げじゃー！」

無論これは詩杏ね。てか別に修学旅行じゃねーし。そもそもなんで詩杏たちあんなに枕持つてるんだろ？ 僕らの部屋は二人部屋なので普通に二つだ。それに対して詩杏たちはみんなが4つづつくらい持っている。(因みに詩杏は6つ。顔が見えなくなっている)どこから持って来たんだ？

「ああ、ちょっとパクツ……うぐぐ」

何か言おうとした詩杏の口を舞ちゃんが塞ぐ。まあ聞こえたけどね。

「違うわよ。脅してとってきて貰っただけよ」

「より酷くなってるよ！？ だったらまだ盗んだ方がマシだったよ！」

「遊喜、1アウト」

そうか、詩杏は今ベットにいた。つまり7つ目の枕がすぐ傍にあつてこんどはそれを僕にむかつてさっきよりも強く投げたって訳か。やるな、あいつめ。

……ってそんなこと思ってる場合じゃない！

「遊喜、死になさい！」

「日ごろの恨み！」

「えええええっ！二人とも僕になんの恨みがあるの！？」

1アウトになったかたかたろうか舞いちゃんと碑霧さんの二人が同時に僕に向かって枕を投げてきた。やばっ、開始早々死んでしまう。

「ま、枕ブローック」

丁度良いところにさっき詩杏が放った枕が降って来たのでその枕を両手に一つづつ掴み、飛んでくる枕に向かって投げる。相殺させようとする魂胆だ。

本当は体を狙いたいんだけどこの状況じゃあしょうがないだろう。

が、僕のそんな浅はかな作戦はこの二人には聞かなかつた。

パァンッ

「僕の枕が弾かれただと！？」

なんとというスピードだ。確かに咄嗟のことで全力で投げたわけじゃないけど、軌道すら変えられないとは。

あ、終わったな、僕。

バチインツ！

体に衝撃がないことを不思議に思いつつ、閉じていた目を恐る恐る開けると、二つの枕が僕のすぐ目の前に落ちていた。どつやら二つがぶつかり合って僕のところまでは達しなかったようだ。

「ちよつと、なにすんのよ！」

「てめえの方が邪魔だっただろ！」

二人枕を投げあう。

バンツ、ドンツ、ボウンツ！

つて、この二人枕のスピードが桁違いなんですけど！もうこれ枕のからでる音じゃないでしょ！

「千駕、1アウト、舞、1アウト」

二人が共に1アウトづつになったところで僕はもう一度、両手に枕を持つ。狙いは、舞ちゃんと千駕さんの両方だ。

見ると、向こう側のベットでは、全く同じ格好で詩杏が立ってた。多分僕と同じことを考えているのだろう。

(二人で、この二人をはけもの狙おう)

(成る程、これで二人の脅威は去るわけだな。流石楽)

さすがに詩杏もこの二人は脅威と感じていたらしい。そりゃそうか。

「いくぞ詩杏！」

「応！」

「え？」

「わっ」

ばふっ。

「千駕2アウト、舞、2アウト」

結果。僕が投げた片方は舞ちゃんにちゃんと当たり、もう片方は詩杏に向かっている途中で詩杏から投げられた枕によって妨害された。逆に詩杏が投げた片方の枕はちゃんと碑霧さんに当たったが、もう片方は僕に届く前に僕が投げた枕によって妨害された。つまり、

「詩杏てめえ僕を裏切りやがったな！」

「楽こそ二人で狙おうって言ってじゃないか！これ完全に狙い餌子ちゃんだよね！？」

くそっ、詩杏さえちゃんと投げれば、脅威の内片方は去ったというのに！

「くそ、これでやりなおしかっ」

しかもついてないことに僕の手元にはもう枕はない。さっきの出使い果たしてしまった。

「飛べええっ！！」

舞ちゃんの渾身の一発が僕の元へ飛んでくる。掛け声は意味わかんないけど。

ブオオオオンッ！

「意味が分かった！これは飛ぶわ！」

なんとか受け止めた物のその威力は健在で僕は地に足つけるのさえ必死だった。っていうかどんな威力だこれ！？

「おらああああああ！！」

今度は碑霧さんの枕。顔面に当たり、僕は咄嗟に歯を使って枕が落ちるのを防いだ。

でもこれで枕が二つ手に入ったぜ！

なんかもうお馴染みのポーズ、両手に枕を持つ形でそれを投げる。勿論僕のそれは舞ちゃんたちとは比べ物にならないくらい遅いので片手で受け止められる。

でも、それは予測済みさ！

ぼふ、ぼふ。

「何っ！」

「詩杏！？」

「そう、舞ちゃん達が僕のほうを向いてる間に詩杏が投げたのさ！駄目だよ敵は僕一人じゃブオオオオ！」

詩杏に投げられた。そうか。敵は舞ちゃん達だけじゃなかった。

「千駕、舞、3アウト、ゲームオーバー。遊喜、2アウト」

「ふふふ、楽、これで勝ったも同然だね」

なんと詩杏は今の間に枕を全て取っていた。対して僕は一つ。そして詩杏、ノーアウト。うわ、絶望的！。

「これで終わられてやるぜい。この量はかわせないだろう？」

詩杏が構える。それは片手に4つ持つ形。つまり両手で8つ。しかも、もたもたしていたらさっきのように追撃も来るだろう。

「ふ、だが甘いぜ詩杏」

「む、どゆこと？」

「貴様は自分の体力を過信し過ぎた！詩杏は8つの枕をすばやく投げてるような体力は持っていない！だったらこっちの方が速いぜ！」

僕は持っていた枕を投げる。勿論狙いは詩杏。舞ちゃん達とは比べ物にならないにしても、今度は片手で力いっぱい投げたのだ、それなりのスピードが出ている。

詩杏はそれを避けることはできない。普通の状態なら出来たのかもしてないがなにせ今は重すぎる。これじゃあ自由には動けまい。

案の定殆ど抵抗できないまま枕は当たり、そしてそのままバランスを取れなくて倒れる。まあ詩杏もともとベットのの上にいたので特に心配することもないだろう。

「詩杏、1アウト」

桂馬がそれを言う前に僕は走り出していた。目標は勿論、今だ動けない詩杏。ベットに無数に散らばっているうちの2つの枕を取り、詩杏を見下ろすように立つ。そしてゆっくり枕を落としてやる。

激戦の火曜日。 馬鹿なっ!?(後書き)

なんと今回約半分が枕投げにつてです。(もったかな?) そんな感じ
でそろそろ最終回を迎えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368n/>

僕らの楽しい遊び方

2011年10月7日13時22分発行